MBSJ2021 Yokohama

MBSJ 2021 YOKOHAMA HISTORIA

MBSJ

第44回 日本分子生物学会年会

The 44th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan

Many thanks to Yokohama, See you again!

2021年12月1日(水)～3日(金)

パシフィコ横浜

横浜ヒストリア

第44回 日本分子生物学会年会　横浜ヒストリア

第21回(1998年)　吉田　光昭 年会長(東京大学医科学研究所)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第24回(2001年)　山本　正幸 年会長(東京大学大学院理学研究科)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第25回(2002年)　藤井　義明 年会長(筑波大学先端学際領域研究センター)・・・・・・・・・・・・・・20
第30回(2007年)　山本　　雅 年会長(東京大学医科学研究所)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第32回(2009年)　小原　雄治 年会長(国立遺伝学研究所)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第34回(2011年)　花岡　文雄 年会長(学習院大学理学部)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第37回(2014年)　小安　重夫 年会長(理化学研究所統合生命医科学研究センター)・・・・・・・・・54
第39回(2016年)　一條　秀憲 年会長(東京大学大学院薬学系研究科)・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第41回(2018年)　石野　史敏 年会長(東京医科歯科大学難治疾患研究所)・・・・・・・・・・・・・・・72

Interview
岩崎　由香／塩見美喜子

Photograph & Booklet
並木　孝憲

第21回（1998年）年会

吉田 光昭 年会長インタビュー

日 時：2021年9月27日（月）15：00～16：45
場 所：Zoom Meeting Room

塩見　『時代を先取りした“みなと”横浜での年会』というキャッチフレーズのもと、吉田先生は横浜で初めて分子生物学会の年会を開催されました。1998年会ではコンセプトもお考えになられたのでしょうか？

吉田　正直に申しまして、コンセプトなんてものがいらない時代でした。ちょうど分子生物学が日本中に広がって、同時に、ゲノムが本格的に動き出したときだったんです。ヒトの全ゲノムが2年後に決まったと言えば、若い人も時代背景がおわかりになるかもしれませんね。分子生物学的な研究への興味が上向きで、学会は皆が集まりたい場所であって、何も言う必要がなかった時代でした。そういう意味では、私はとても恵まれた環境で年会をやらせてもらったと思っています。

塩見　分子生物学が爆発的に伸びていた時代、キャパシティに見合う会場をどのように検討されたのですか？

吉田　新しい研究が展開するのは研究者にとって最も大きな魅力ですからね。おもしろいから興奮して皆が集まる。会員がどんどん増えて年会の参加者も増加しつつあったので、それまでの会場では賄いきれず、最大規模の場所として横浜にしました。ただ、大変立派な施設ですから学会の補助だけではとてもやれるわけがなくて（笑）。それで、勝木元也先生（2003年会長）と私が中心になって考えていたのが、先ず若い人が参加したい年会にしたいということでした。若い人が口頭発表する機会を多くしたい。出来あがった立派な研究者だけじゃなくて、大学院生だとか、大学院を出て間もない若い人たちの発表の機会を増やしたいと思うとさらに会場が必要になる。しかし資金がない。ところがご存知のように、我々研究者にはそういう才能がないので、学会等の運営会社に声をかけました。お金はないけどこういうことをやりたいと頼んで、いろんなアイディアを巡らせてもらって年会のカタチをつくっていきました。それがその後の年会に定着するんですが、ひとつは研究機器の展示場の変更でした。従来は小さなコーナーに機器が並べられた展示でしたが、大きな展示場を作って、ブースのサイズと場所によって値段（出展料）を変えましょうと。大きい出展には一等地を占有してもらい、それだけお金を出してくださいと。これがすごく当たりましてね。当時はゲノムの研究機器も急速に発展しつつあって、外国の大手企業などが新しい機器のブースを出してくれたりして、そうやって資金を稼いでくれました。

塩見　なるほど。機器展示の考え方を大きく変えた年会となったのですね。

吉田　もう一つ、今はどこの学会でもやっていますけれど、ランチョンセミナーですね。これ自体は新しいアイディアではなかったのですが、ランチョンの会場をたくさん作って、お弁当はただで配ってもらいました。場所を提供するだけで資金が集まるわけですから、会場の広さを活用して、資金確保もできました。研究の中身も、機器も、集まる人も、全部が右肩上がりの時期でした。

塩見　うらやましい限りです。

吉田　申し訳ございません。塩見先生の年会長挨拶を読むと、横浜が最後になるかもしれないって書いてあるじゃないですか。知る人ぞ知るってありましたから、やはりお金なんだろうなとすぐに分かりました。どの年会長さんも悩むお金、学会のコンセプトなどを考える必要のないところで年会をやらせてもらった私でしたが、年会の目標が一体何なのか分からずじまいでした。年会ってどんな目的でやるんだろうねっていう話をしたのはしたのですが、「吉田さん、そういうことより、ちゃんと人が集まって、皆がよかったと言う会をやるのが大事なんだよ」などと言われて、その気で終わったのですよ。私の年会の記憶というのは、お金集め以外はあまりないです。すみません、中身のないからっぽの年会長だったんじゃないかと思っています。

塩見　そんなことはありません。先生方の新しい試みや運営会社さんのヘルプもあって、それが日本の分子生物学という学問を引っ張ったんだと思います。

吉田　そう、ポイントは引っ張ることですね。年会に行きたいと思うポイントは、いい研究があるかないかですよね。ですが、いい研究をリードすることは年会には無理ですから、年会が出来ることは若い人たちを刺激することくらいでしょう。それで私たちが思ったのは、口頭発表の機会を増やそうということでした。すべて口頭発表前提でアブストラクトを募集して、あなたはポスターへと落ちましたよって平気でやりましょうと。競争の意識を煽ろうと思ったんですけど、反対されましたね（笑）。

塩見　あら、そうですか。

吉田　反対には理由がありましてね、学会というのは会員が参加して、発表するのが権利であると。日本の悪い平等主義だと思いますね。そういう反論は若い人からも年配の人からも言われました。口頭発表で選ばれるのは名誉なことであると、そう思ってもらえる年会をやろうじゃないかと言ったんだけれど、そこらへんまではいかなかった。今も、最初から口頭発表を希望しないポスターというのが定着していますよね。そうじゃなくて、一生懸命に研究したんだから、一生懸命アブストラクト書いて、いい研究として選ばれましたって言えるような分子生物学会になれば、若い人たちのひとつのステイタスになると今でも思っています。若い人をどう刺激するか、年会とは一体何か、難しい課題ですね。それに、学問の進歩がフラットになった今の時代の若い人たちはとても気の毒だと思います。

塩見　エキサイトメントが少なくなりますよね。これを選ぶと正解、ということはサイエンスにはないですからね。

吉田　その通りですね。個々の研究とは違い、学会などの活動目標などと云ったものには、正しい答えなどはないわけで、何かをやってみて結果が出れば、それが正しい挑戦であったとなるようなものだと思います。今の学問の進歩からいうと、5年あるいは10年で修正するというようなものでもいいんじゃないかと思っています。3年ほど前の学会創立40周年記念対談（https://www.mbsj.jp/about-mbsj/40anniv_taidan.html）のとき、分子生物学会にそれを求めたいとさんざん塩見（春彦）先生にかみついたら、大変困っていましたけど（笑）。彼とは昔のことですが、知り合いだったので、心安くものごとを申し上げたものでね。ところで塩見春彦先生とこちらの塩見先生って関係ある？

塩見　関係ある。夫婦、パートナー。

吉田　あっ、それは失礼をいたしました。

塩見　お世話になりました（笑）。

吉田　いや、そのときはですね、分子生物学会はもっと社会貢献できないもんですかねってことが話題になったんです。例えば癌学会はがんを治す、それで社会に貢献すると、はっきりしているんです。ところが分子生物学は、ひとつひとつみれば社会と接点があるものの、学会が直接つながっているわけではないんですよ。窓口がないと資金が集めにくいから、そこを何とか考えたらどうですかって、塩見（春彦）先生に言ったんですよ。ただこれは非常に難しい。

塩見　まさしくそうなんです。例えばうちの母とか親戚などに、がん研究ならすぐ伝わるんです。なぜなら、がんというのは自分の身近にあるので。分子生物学は共通言語ですよね。植物学、動物学、がん研究、そういうもともと分離されていたもの、わかりえなかったものをつなげたのが分子生物学だと。それが融合し始めて、さらにそれを土台として積み上がったものがあって、今3Dになって、その枠組が分子生物学だと私は思うんです。当然、いろんな学問に対して貢献しています。がんもそうだし老化もそう。そのあたりは人に近いので分かり良いんですけれど、枠組はなかなか外から見えないところにあって、でもそれがないと倒れてしまいます。分子生物学は、生命科学っていうものの枠組というか、家の基礎みたいなものかなと思っているんです。

吉田　全くその通りです。問題は、世の中の人たちにその貢献が上手く伝わっているかなんですよね。さらに年会は一年単位だから、2021年会はこれでやるんだって先生が言っても、次の年会で継承されるかはわからない。こういうことはある程度継承されないと実際の効果が出てこないですよね。寄付を集めるにはそのための旗印が必要なんですが、それを今の分子生物学会に思うわけです。皆は平穏無事で、年会長になった人たちだけが困った困ったと言っているのが実情ではないのかという気がしないでもないですね。

塩見　そうかもしれませんね。ありがとうございます。このコロナの状況で、昨年2020年会は上村匡さんが苦渋のご決断で基地局を京都に設置、オンラインで開催されたんですよ。だから特に若手は「今回は対面でやりたい、横浜に行きたい」という声が大きいです。インタラクションという繋がりを若手は切望していますね。

吉田　オンラインだけにしたら終わりだって思いました。文字や画面からでは伝わらないものがあるだけでなく、予期せぬ出会いが無くなりますね。人と出会うこと、アイディアと出会うことがとても新鮮なはずですね。研究成果の交換というだけだったら論文を読めばそれでいいので、年会をやる意味がない。自分がこれを聞きたいってオンラインで聞けば、そこだけで終わるんですよ。でも、現地の会場に行くと、空いた時間に自分の領域とは関係のない講演を聞いたり、思わぬ人と出会ったり、「えっ！」ていうことがあるでしょ。

塩見　あるある。

吉田　人と会って無駄話しているときの「それそれ！」っていうのがすごく大事だと思うんです。セッションよりアフターセッションが大事なんですよ。コロナみたいな特殊事情のときはしょうがないですけど、オンラインだけじゃダメです。問題はコミュニケーション、人と人の交流なんですがこれがまた難しい。参加者が数千人の頃、分子生物学会も年会での懇親会というのをやっていたんです。ところが、参加者が多すぎて、懇親会が始まっても食べ物のテーブルに辿り着けない。追加の料理を頼んでも、お皿がメインのテーブルに着く前に全部なくなってしまう（笑）。マンガみたいでした。これでは懇親会をやる意味がないだけでなく、不満が残るだけということになりました。その時でしたね、準備委員からミキサーをやったらどうかと意見が出て、それでアドホックにやったんですよ。機器の展示場とか、あっちこっちにテントを張って、缶ビールをただにするとたくさん飲む人が出てくるから、非常に安くして提供しました。夕方からそれを片手に建物の外でも中でも話ができるようにしようと。まぁ、どれほどコミュニケーションの効果があったのかは分かりませんでしたが。喜んだ人は結構いたみたいですけれどね。

塩見　それは喜ばれたと思います。その年会、今もあるなら私も行きたいくらいです（笑）。昨年できなかったことを今年はぜひ挽回したいと思います。それでは、女性研究者の現状について、先生はどのようにお考えですか？

吉田　学会としてはこれは難しい。学会の運営とか年会の運営に、女性研究者をたくさん登用すること以外にできることあるのかな。研究者になって特別の辛い思いをしなくても生きていけるっていう社会環境が作られなければ、それは無理ですよね。これは学会の外の問題。分子生物学会がやるとしたら、それをどこに働きかけるかがひとつの方法ですね。たとえば行政とか、経済界とか、個人では出来ないことですから、やりようがあるかもしれません。

塩見　文科省や教育機関の人を呼んで対談したりもしているんですけれど、3年くらいで人が替わって、そのたびに振り出しへ戻って自然とフェードアウトしますよね。

吉田　別の局面でもそういう経験を大いにしてきました（笑）。彼らはわかってくれるんですけど手を付けない。それなら、やらなくちゃいけないように仕向けるのが戦略というか戦術ですよ、難しいですがね。何よりも、若手や中堅の女性が魅力を感じて続けることができる環境を作ってあげないといけないでしょう。

塩見　先生がおっしゃるように、まず、サポートはできるじゃないですか。同等の男性と女性がいる、女性を起用しよう。だけど、あまりにも負担になると、若手からみたとき、あんなに女性はつらい想いをしている。これではダメですよね。それを周りがサポートするような支援体制が大事なんでしょうね。うちも子どもがいたんですけれど、しんどいのは8歳くらいまでなんです。この8年間を経済的にサポートする。男性も女性も同等に扱うから、だからやりなさいよって。そういうやり方は端的でいいのかなって思うんですけど、いかんせんお財布がないので。

吉田　そのお財布、学会で作れないんですかね。もちろん、会員から集めるのではなくて、そういう趣旨の御旗の下に袋を作って、是非にもそこに入れてもらう。叩かれても非難されても、失敗しようが挫折しようがやり続ける。そんなことを、学会に期待してはいけないですかね。いま言われたように、具体的にサポートの中身が決まっているなら、やりようによっては出来るのではないかな。最近ではクラウドファンデイングなどと云うのもありますよね。私はしばらく会社に行っていたおかげで、こういう発想ができるようになりました。研究が技術を作ると同時に技術が新しい研究を作るというのも正しいですよね。技術は大きなリーダーという感じがよく分かってきたのです。「技術」を「お金」という文字に置き換えても、話は成り立つんです。

塩見　でも本当にそうで、研究者も井の中の蛙ではダメだと思うんです。先生のようにいろんなご経験をされて、思考もいろいろだと、新しいアイディアも出ますよね。日本人は抜きん出るのが嫌いじゃないですか。平均的に何かやるというのが大好き。研究者の魅力っていうのも、私はそこをもうちょっと押し出してもいいかなと。

岩崎　すっかり吉田先生のお話に聞き入っていました。これまで、幅広い分野が混在しているところが分子生物学会のいいところなんだろうと思っていたのですが、どこか抜きん出るところをアピールして社会貢献や資金調達につなげるっていう視点も大事なんだというのが目から鱗でした。

吉田　広く生きものを理解する、分子のレベルで理解するというのを一手に引き受けている分子生物学会は非常に価値がある。必須であるだけ十分意味がある。ですがね、ダーウィンは、強いものが生き残るわけじゃない、その時代と環境に適応したものが生き残ると言った。このように思えば、学会も変わるべきだと思うんです。現状を見ていろんなことに挑戦するのだと。

岩崎　常に挑戦してこられたのですね。先生の年会ではコンセプトは不要だったというお話がありましたが、大盛況のなか皆さんハッピーになって終わったというのが根幹的に大事なところなんだろうと思いました。今年の2021年会もそういうふうになるようにがんばりたいと思いました。

吉田　ぜひがんばってください。一般に良し悪しの判断にアンケートなるものが使われますね。日本的には、年会がよかったかと質問すると、多くの人がよかったというところに〇印を付けるでしょう。だからこんなのはどうですか。質問に、「こういうことが不都合だった、このようなことが足りなかった」という項目を作る。アンケートのネガティブ評価を次の年会長に申し送る。イヤなことですけど（笑）。

岩崎　最近は匿名だと結構本音を引き出せるなと思うこともあって、例えば授業評価でも、この先生の授業はわかりにくかったとか、あのスライドはそうじゃないと思うみたいなことも正直に書いてくれます。分生のアンケートでも、結構ざっくばらんに皆いろんな意見を出してくれる気もしてきますね。

吉田　日本人はマイルドなのか遠慮するのか本音をあまり語らないんですよ。日本文化なんだなとしみじみ思ったり、いい時と悪い時があるなどと思ったりします。悪いところに丸を付けるっていう質問の仕方をやってみると何かわかるかもしれません。

塩見　ちょっと考えてみたいと思います。

吉田　ここ最近、私は年会に出ていないんです。いくつか理由がありますが、その中に英語があります。スライドを見れば大体のことはわかるんですが、微妙な言い回しとか、ちょっとした言い過ぎなどの議論は、聞き手にとって難しいところがあります。若者にとっていい学会なるものを、年寄りが推し量ってはならない問題なんですが、理解や発表の練習は日本語が原点だと思っています、古い私ですので。考えがきちんとしていれば日本語がちゃんとできるし、日本語が出来る人は英語もうまいし発表が大変うまいと言われます。自分自身の経験ですが、仕事が良くても発表がうまくなければ低い評価を受けることになります。若者には多くの人の前に立って発表する機会を与えて練習することが大切だと思います。大切なのは言葉ではなく、発表のスキルだと思います。この視点から、年会は若い人たちが勉強・学習する場所にしたらどうかなって思っています、国際化の前に。立派な仕事をした人たちは国際的に向こうでもしゃべるし、論文も出る。日本でわざわざ英語でしゃべることはないんじゃないかと。出来上がった人は外国のミーティングに出ればいいんですから。

塩見　はい、現地で、対面でやることの重要さをあらためて感じました。議論しやすい日本語もうまく取り入れなさいということですね。

吉田　細かいことは英語で言える人がいても理解はできない人も多いですから、学生の質を落とすことにならないようにと心配しています。

塩見　まさしくそうだと思います。理事会のほうへも反映させていきたいと思います。

吉田　急に、突撃隊みたいに走らないように。

塩見　はい、日本人なのでマイルドにやっていきます（笑）。先生、楽しいお話をありがとうございました。よろしければ12月の年会にいらしてください。横浜はロケーションもとても良いですし、魅力がたくさんありますので。年会に参加するだけじゃなくて、その後の、例えば中華街で夕飯を一緒にするとか、そういう場も大事なんですけれどね、科学の発展には。

吉田　私などはアフターセッションのコミュニケーションが大事であると、今日まで言い続けてきたじゃないですか（笑）。困難もあるでしょうけど、実際にやってみる。そうすると必ず何かそこに問題が起きるんです。それを解決するための努力が新しい道を拓くんじゃないかと。議論が学会の中で起きるということを期待しています。

塩見　私もまったく同感で、そのように思います。ぜひ横浜にいらしてください。本日はほかで聞けない話が色々聞けまして、いっぱい笑いました。吉田先生、本日はありがとうございました。

吉田 光昭（よしだ みつあき）
1939年生まれ
第21回（1998年）年会長

1961年　富山大学薬学部卒業
1967年　東京大学大学院薬学系博士課程修了、同　助手
1969年　英国MRC Laboratory of Molecular Biology, Cambridge, UK　客員研究員
1975年　癌研究会癌研究所ウイルス腫瘍部研究員、主任研究員、部長歴任
1989年　東京大学医科学研究所　教授、1996-1998年 同　所長
1999年　萬有製薬株式会社　常務取締役、つくば研究所　所長
2005年　東京大学大学院新領域創成科学研究科　客員教授
2009年　癌研究会癌化学療法センター　所長
2015年　がん研究会がん化学療法センター　顧問

第24回（2001年）年会

山本 正幸 年会長インタビュー

日 時：2021年8月19日（木）10：00～11：45
場 所：東京大学 本郷キャンパス 理3号館

塩見　山本先生、本日は3号館までお越しいただきありがとうございます。横浜で年会を開催された年会長へのインタビューということで、まず、2001年会のコンセプトから聞かせてください。

山本　今回お声がけがあって、さて何を話そうかと整理してみたのですが、吉田光昭先生（1998年会長）が私の3年前に初めて横浜で開催されて、私の回はまだ2度目の横浜年会でした。今になってみると、もっと以前から横浜で開催していたような気がします。横浜は言わずもがな、非常に大きな会場というのが第一印象でした。それで、広大な展示場をフルに活用して、ポスターは演題ごとに二日間掲示し、会期四日で開催したいと考えました。ところが、ありがたいことですが、企業展示が想定以上に集まり、発表者数も予想を超えて、ポスターを収容するスペースが足りなくなってしまったのです。見込みで印刷した要旨集も大慌てで増刷しました。分子生物学会が急速に大きくなっていることにあらためて気づかされましたね。

塩見　前年から会員が1000名以上、年会参加者も1500名の増加では、予測されるのはむずかしかったと思います。

山本　特に当時の分子生物学には、生命科学の各分野がそれぞれ築き上げた基本概念や独自の用語で理解していた、分散していた生命科学の体系をひとつにまとめていく力がありました。右肩上がりで関心をもつ人が増えていて、翌年の横浜年会はさらに参加者が増えました。最初は小さなコミュニティーから始まった分子生物学でしたが、それが発展するにつれて、従来からあった生物学の分野、たとえば遺伝学や発生学、分類学などにまで分子生物学的なコンセプトが浸透し、DNAを研究対象とする人が分子生物学会に集まってくるようになりました。また、医学の領域でも、免疫学をはじめ様々な分野でDNAを扱うようになりました。昔は、動物学と植物学の間にも高い壁のようなものがあって、たとえばタヌキの生態を研究する人と植物の分類を研究する人が議論するような場面はほとんどありませんでした。ところが、DNAや遺伝子を共通言語として、互いに話が通じるようになり、動物学教室と植物学教室が統合して生物学教室になる、そういうことが進んでいた時代でもありました。それほど、分子生物学は大きな力を持っていたんです。

塩見　非常にいい時代ですよね。

山本　それから、私たち人間の実生活とつながりのある医学や農学の分野にまで分子生物学が波及したことで、分子生物学会に対して関心をもち、年会への寄付や出展などでサポートしてくださる企業が増えました。そういう時代背景でしたので、年会を開けば人が集まって活発な議論が展開しました。だから実は年会として特別なコンセプトを設ける必要がなかったんです。

塩見　本当に素晴らしいですよね。うらやましくも思います。

山本　学会自体がそういう基盤の上にあったので、とにかく、心地よい議論の場を提供することがその当時の唯一の方針だったと言えるんじゃないでしょうか。アイドルのグループがコンサートを開けば、歌が上手いかどうかは関係なく人が集まるのと似た状況だったように思います（笑）。

岩崎　生物の垣根を越えて、分子生物学やDNAという共通言語で語れるのって、ものすごくおもしろいと思います。共通言語が使えるとなると、原理というか、根幹的な法則性にアプローチできるんじゃないかという期待にもつながりますよね！

山本　そうですね。遺伝子にしてしまえば、動物でも植物でも共通に考えられる部分もあるので、当然、こちらでわかったことがあちらで役立つというようなことが出てきます。ですから、年会としてはなるべく広く議論の場をもつ、いろんな分野を受け入れることで議論をさらに発展させるのが分子生物学会としてのコンセプトでした。ただ、そうなってくると、既存のエスタブリッシュした分野から「分子生物学は単なる技術なんだ」という議論も出てきたんです。たしかに、分子生物学的な手法はテクノロジーの分野にも貢献していて、そういう側面があればこそ企業からサポートしていただけるということがあったと思います。ただ、私は、得体の知れない大腸菌やファージにのめり込んで何をやっているのだろうと思われていたマニアックな人々の系譜にいるので、分子生物学は単なる技術ではないと強く感じていて、学問としての分子生物学を大事にしなければいけないと思っていました。しかし、分子生物学は科学なのか技術なのかという議論を表立って始めることは、学会に無用の分断を持ち込むことになりかねないと考え、2001年会ではあえてその点について議論しないようにしました。その一方で、より一般的な意味で分子生物学と社会とのつながりを意識したシンポジウム『21世紀の生命科学：バイオサイエンスは日本の未来を開くか？』を企画し、応用科学をサポートする分子生物学と、個々の研究者がやっているスモールサイエンスとしての分子生物学とのバランスをどうやってとるのか、というあたりを私としては議論したいという気持ちがありました。もうひとつは、分子生物学がおもしろい学問なんだとわかってもらえるような企画ということで『ポストゲノムを支えるモデル生物』のシリーズシンポジウムをプログラム委員会に企画してもらいました。これから分子生物学的な発想を用いて斬り込もうとしている、まだ何が出てくるかわからない、そういう分野が興りつつあることを知っていただく。若い人の目をそこに向けてもらいたい、という期待を込めて、年会のプログラムに潜り込ませることにしたんです。

塩見　今よりも当時のほうが学ぶことも多かったのかもしれませんね。分子生物学そのものはそれ以前からあったんですけど、年会の場で一堂に会して視点をきちんとする、その第一歩になった年会だったのかなと先生のお話を聞いて思いました。

山本　線虫が分子生物学の対象に入ってきたのには、生物の行動がどのように制御されているかを分子生物学で突き止められるか、という狙いでモデル生物として立ち上げられた経緯があります。大腸菌だけではなく、研究対象をさらに拡張していこうという当時のような発想は大事だと思います。

塩見　モデル生物シリーズで扱われたものは今でもすべてが大変重要ですし、どれも欠くことのできないものですよね。また、シンポジウムだけでなくワークショップの座長や演者も錚々たるメンバーがずらりと名を連ねてらっしゃるし、分子生物学会の力というか、そういうものも感じますね。

岩崎　これだけの生物種を同じ学会で議論できるのも素晴らしいですよね。横に並べて広く色々な分野をみていくことによって、予想外のアイディアに繋がることもあるかもしれませんし。

山本　閉鎖的・限定的にするのではなく、分野の外の人に向かって「こういうところではこういうおもしろいことが起こっていますよ」と知らせていくようなことをやるべき学会なんだと思います。本屋さんで何冊かパラパラとめくって買う本を決めるような感覚がもてるといいんじゃないですかね。

岩崎　たしかに、分生の年会には「どんなおもしろい新しい話が聞けるかな」という想定外の出会いを期待するようなわくわく感もあります。

山本　分子生物学は技術か、について補足すると、数学は物理学にとって重要な解析手段ですけれども、だから数学は技術なのだと言う人はいません。小川洋子さんの『博士の愛した数式』にも出てくるオイラーの公式$e^{i\theta}=\cos\theta+i\sin\theta$は、数学好きから最も美しい数式と評されることもある非常にシンプルな公式ですが、まるで宇宙の神秘がここに凝縮されているような究極の感覚を与えてくれます。似たような意味で、分子生物学は生命科学においてそれ自身が確固たる位置を占めている、と今でもそう思っています。

塩見　分子生物学が生命科学の共通言語と言われる所以ですか。すごくわかります。実際に若手はそういう教育を受けてきていますしね。学会の創立当時から、とにかく若手を第一に考えている分生ですが、山本先生からみていまの若手、あるいは取り巻く環境をどのように考えていらっしゃいますか？

山本　むずかしい時代であることはたしかでしょうね。私たちの時代は生まれたときにテレビなんてありませんでした。生まれたときからテレビがある時代を経て、いまでは、もう最初っからパソコンやスマートフォンがある。研究以外に興味をひくものが山ほどある。そういう、身体の中にしみ込んだものが違う人たちに対して、そうではない人があれこれ言うべきではないと私は思っています。今の若い人たち自身が、今何が大事なのかを考えて行動してくれたらよいのです。もちろん分子生物学にはおもしろい問題がまだたくさん残っていると思うし、そういう研究にチャレンジしてほしい気持ちはあります。ただまぁ研究環境を一括

りにして言えば、いろいろな理由があるのでしょうけど、日本のいまの政策が基礎科学を大事にしていないのは絶対よくありません。

塩見　ノーベル賞をとるような先生がいくら言っても変わらないんですよね。最近になってファンディングエージェンシーが若手を大事にしようって言い出して、42歳くらいまでは少し厚くなってきているようです。でも、若手が腰を据えて研究できるようにしてあげなければいけません。大学はお金がないし、運営費交付金も減るし、自分で稼がなきゃいけないし、稼ぐためには論文がいる。でもその論文を出すにはバイオインフォもしなくちゃ、構造もとらなきゃ、そうなるとお金のある人はできるけど、そうでない人もたくさんいるんですよね。非常にやりにくくなっていると感じます。

山本　テクノロジーが発達したのはいいんだけど、逆にそれを使っていないとサイエンスができないような時代になっているのは問題ですね。しかし、極端なことを言えば、「そういうサイエンスが本当におもしろいんですか？」という疑念もあるんですよ。だったら時流に流されずに誰も考えていない新しいことを考える、それが許されるような仕組みで研究費が配分されるべきです。基本的なサポートというか、一極集中で大きなお金をつけるのではなく、全員にある程度のお金は必ず分配される、それが基本だと思います。かつかつにしろ何とか信念を貫ける状況があってこそ、全く新しいブレイクスルーが出てくるのでしょう。

塩見　大事なことですよね。最近よくやられる引用回数っていう計り方だと、反論のときも引用されるので、いまいちですよね。数字が高ければ良いとするのは仕組みとしては簡単ですから。

山本　インパクトファクター至上主義みたいになって、このレベルのジャーナルに論文を通すためにはこれこれのデータを揃えなさい、ということがまかり通っています。出した論文も内容ではなくジャーナルのインパクトファクターや引用回数だけで評価されがちです。すばらしい論文を書きましたねとか、おもしろい論文を書きましたね、っていうことではなく、こちらの論文のほうがインパクトファクターが高いからあちらより優れてますねって。本来そういうことで論文の価値は計れないですからね。

岩崎　とくに人事公募などでは、論文のインパクトファクターを中心にみるのではなくて、そのひとが持っている技術とか、研究内容と将来的な発展性をしっかり審査してもらえると期待したいです。

塩見　そうよね、単なる数字だけに頼らない、研究者を多面的に複合的にみる審査でなくてはね。さて、2001年会ではスピーカーが全員女性のワークショップ『分子生物学の新しい潮流』を企画されました。20年前のことですので、それこそむずかしさがあったのではないでしょうか。

山本　企画のきっかけは、この年に小川智子先生（第12期会長）が分子生物学会で初めての女性会長になられたんですね。それで、柳田（充弘）先生（第11期会長）とお二人で世話人をお務めいただいて、女性だけの企画をやろうということになりました。小川先生は私よりひと世代上の方ですが、がんばっている女性研究者がいるんだということを知らしめたいというアファーマティブアクション的お考えと、しかしサイエンティフィックなレベルで妥協はしないというお考えの上に企画されたので、内容的にも聞き応えがあるワークショップでした。今日では、アファーマティブアクションについてはあったほうがいいというのが議論の大勢ですが、そういうアクションのおかげで自分がポストを得たと思われたくない人もいます。いいサイエンスをしてきたから今の自分があるんだ、という考えはよく理解できます。女性の中にもやはり考え方には幅があるわけですよね。ですから、男女共同参画に関して何かひとつだけ方策を出しても、ある人にはメリットだがある人にはそうではないということもある。2001年会で得た私個人の教訓として、女性研究者支援の方策はある程度の幅をもってみていかなければならないとずっと感じています。

塩見　イケイケのときだと、多くが前を向いていますし、新しい企画にも取り組みやすい状況だったのかもしれませんよね。

山本　この時代になってくると、分子生物学のもつ力の拡大がもちろん背景にあるわけですが、気がついてみれば分子生物学会は完全に社会的な存在になっていました。学会としてそれに応えうる態勢をとらないといけない時代に入ってきたのだと思います。世の中に男女共同参画という言葉は出てきていたし、学会の規模は発足時のように同好会的な運営でやれる範囲をとっくに越えていました。早くから法人化していた学会とは違って、分子生物学会にはサイエンスだけをやっていければいいという人たちが多くいました。ある意味ではそれが許されていたということでしょうけど（笑）。もちろん、本当はポリティカルに深い考えのある人もたくさんいました。学生の頃に下働きでこき使われたり、学問というものは社会と無縁ではないと教授たちを捕まえては議論をふっかけていたりした時代があって、でもあまりうまくは解決せずに政治的な挫折を経験した人たちも少なくありません。社会に対する意識はあるのだけれども、当面はサイエンスに集中しようとする人が多かったのだと思います。それだけ分子生物学が学問としておもしろいということもあったと思います。そういう意識を基盤に拡大していった分子生物学会は、社会との関係をなるべく回避しようとしてきた学会と言えますね。それでも、日本でヒトゲノムプロジェクトを始めるかとなったとき、この問題は分子生物学会で大きく取り上げて真剣な議論がありました。推進派がいる一方で、プロジェクトを始めるとほかの研究分野が圧迫されるんじゃないかとの反論も強く、総会の場で賛成反対の喧々諤々がありました。

塩見　1999年にアメリカから帰ってきて、まさにこの頃の分生に参加していたので、こんなに熱い議論をするんだって感覚を覚えたんですよね、分子生物学会の年会で。そういうふうだったんですよ、あらを探して突っ込む人が多

いこと（笑）。

山本　そうでしたね。そういった好き勝手なこと、議論が議論を呼ぶようなことをしてきたいわば“青臭い”学会でも、会計の規模がものすごく大きくなっていました。望むと望まざるとにかかわらず、分子生物学会が社会性を高めなければならないフェーズに入ってきて、法人化に向けてバタバタし始めた時期でもありました。学会として社会とのつながりを考えなければならない、任意団体ではもう済まない、そういうターニングポイントに差しかかっていた気がしますね。

塩見　国立大学の独立行政法人化が進められていた頃ですし、分生くらいの規模ですと、学会の法人化は必然の流れだったと思います。

山本　そんな時代背景のなか、2001年会で分子生物学会として初めて保育室を設置しました。会員から年会に保育室があるとありがたいというご意見があったんですけど、組織委員会では全員が設置に賛成というわけではありませんでした。その大きな理由として、当時の分子生物学会が法人格をもたない任意団体で、もし年会の保育室で何かしら事故が起きたときに責任をとれるのか、そういう観点から反対される方が多くありました。本当は満場一致となればよかったのでしょうけど、最終的に判断を年会長に一任していただき、何かあったときには私が個人的に法的な責任を負おうと思い定めて、年会に保育室を設置するという決断をしました。時代の流れからも、分子生物学会としてはこのあたりで決断しておかないといけないと考えました。そこで、大坪久子先生と菊池淑子先生にまとめ役をお願いし、あらゆる面から検討していただいて設置を具体化していきました。万が一のときには保険が適用されるところまで契約を進めることができました。初めての設置ということで、年会へのサポートとは別に保育室に対して寄付してくださった企業もありました。結果的に事故もなく、この保育室の設置が分子生物学会が男女共同参画に目を向けるきっかけになって、翌年に男女共同参画ワーキンググループが置かれることとなったのです。

塩見　20年が経って、もっと変わってほしいと思うところもあって、実は、今年は、女性研究者のアファーマティブアクションというか、女性に参加してもらいたいという記載を公募シンポジウムとワークショップの募集要項から削除してしまおうと思っていたんです。でも、結局は残しました。やはりそれをとってしまったときの反応が怖かったんですよね…

山本　おっしゃる意味はわかります。ただ、よくよく思い返してみると、20年前の組織委員には女性がひとりもいなかった。そういう意味では、学会は大きく変わってきたんだと思います。当時は意識としては非常に低い状況だったけれども、分生の男女共同参画元年だったという評価もいただいています。分子生物学会が男女共同参画のワーキンググループを立ち上げたのと同じ時期に、学協会を横断する男女共同参画学協会連絡会が設立されたので、学会として後れを取らずによかったと思っています。

岩崎　これだけ男性ばかりの組織委員会で保育室を設置しようという英断が素晴らしいと思いました。先生がそこで前例をつくってくれたからこそ今まで続いているのだと思いますし。

塩見　コロナ禍ではありますが、今年も年会保育室を設置いたします。現地に参加して議論をしてもらいたいですから。それでは、国際化やオンライン化についてはいかがでしょう？

山本　おそらく国際化のひとつと考えられる年会の英語化については、数十年前から話には出ていたんですけど、完全英語化には踏み切れなかったですね。言語が活発な議論を阻害するようではよくないですからね。日本人同士で日本語なら一瞬でわかることが、英語で議論しようとするとちょっともたもたしたりするじゃないですか。発表準備してきた説明はうまくできても、話が少し横にそれると途端にギクシャクするとか。

塩見　発表スライドは英語で、わかりにくそうなところを日本語でフォローしようとすると、意外と煩雑で見にくくなったりもして。本当にむずかしい問題だと思いますね。日本人は若手ほど英語力がいまひとつと言われることもあったり、グローバライゼーションと言うわりには気持ちばかりが急いて追いつけていない感じでしょうか。

岩崎　今の若い人は小学校の頃から英語の授業を受けてきているから、なんとなく英語もそんなに辛くないのかなと思っていたんですけど、若い人にとっても難しいんですね。初めての学会発表で英語化のために活発なディスカッションができず、学会発表があんまりおもしろくないなと思われてしまっても悲しいですよね…

塩見　そう、学会はおもしろくないってなってしまうとね。大学が飲み会を禁止せざるをえない状況が続いて、学生さんもかわいそうですよ。分かり合う人がいない、作れないなか、学生生活を送っているんですから。

山本　国際化やオンライン化の負の部分として、ふらっと行っておもしろそうだなっていう感覚が養われにくくなってきますね。英語の専門用語がわからないなどハードルが高いと、この分野はみても理解できそうにないと避けてしまって、ポスターをみなくなりますよね。また昔は、年会に招かれた外国の偉い先生のお話を聴く貴重な機会に英語がわからないと困ったりしたのだけど、これだけネット社会が発達して、そういう時代ではなくなっていますしね。自分でちょこっと調べれば最新の情報がわかることも少なくないですし。

塩見　著名な先生の講義などもネットからたくさん拾うことができるけれど、でもそれを若手が活用しているかと言えばそんなこともなさそうだし。ちょっと自分の研究とは違うものって分けてしまっているようにも思います。

岩崎　近い将来、日本語で発表したら自動翻訳で同時に英語が流れるなど、テクノロジーで言語の壁を突破できるような時代になるか

もしれませんね。

塩見　スピーカーを通ると言語が変わってしまうみたいになるかも。そうなると学会の在り方も大きく変わるでしょうね。現地に行く魅力って、自分の発表以外にも誰かに会って直接、対面で話がしたいみたいなこともありますから、2021年会はなんとか対面主体のハイブリッドで開催できるよう努力してきました。

山本　オンラインにも、これからはお作法というか、色々なサポート技術が出てくるだろうと思います。いまはまだ質疑の場面とかはどうしてもぎこちなくなってしまうから、まあ発言しなくてもいいかと、積極性がなくなって全体的に大人しくなってしまいますね。オンラインにも便利なことがあるので、テクノロジーがそのあたりをどう埋めていけるか。研究者がどう使いこなせるかですね。

塩見　最後に、私たちの2021年会へエールをお願いします。

山本　若い人は自分のやりたいことを自由にやっていただくのが一番です。自分がおもしろいと思ったことに打ち込んでいくことが基本で、サイエンスが始まって以来不変の大事なことだと思います。そのなかで苦しいこともあるかもしれないけど、やりたいと思っていることを是非やりとげてほしいと思います。

岩崎　先生のお話を伺えて、若い世代としてとても勇気が出てきました。今日の保育室をつくるお話など、自分が責任をとってでも決断をしてきたその勇気ある行動を知ると、私も大事なときにはしっかり自分の身を切る覚悟でやらなきゃいけないんだなという気持ちになりました。

山本　生き物っていうのは世代交代していくものですから、人間もそう、世代交代をきちんとやらないといいことはありません。

塩見　山本先生、本日は本当にありがとうございました。

山本 正幸（やまもと まさゆき）
1947年生まれ
第24回（2001年）年会長
第13期会長、第8、9、12期評議員、
第15、16、18、19期理事、
第7期会計監査、
第4、5期会計幹事、第10、11期編集幹事

1975年　東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
1975年　ウィスコンシン大学酵素学研究所研究員
1979年　京都大学理学部　助手
1981年　東京大学医科学研究所遺伝子解析施設　講師
1985年　同　助教授
1989年　東京大学大学院理学系研究科教授
2007年　同　研究科長
2011年　かずさDNA研究所　所長
2013年　自然科学研究機構基礎生物学研究所　所長

第25回（2002年）年会

藤井 義明 年会長インタビュー

日 時：2021年10月5日（火）14：00～15：45
場 所：東京大学 本郷キャンパス 理3号館

塩見　2002年会は前年に続く二年連続の横浜年会として開催されました。まず、先生がコンセプトとされたことなど、そのあたりからお伺いできればと思います。

藤井　あらためて思い返してみたんですけど、おそらくコンセプトのようなものはなかったんじゃないかと思うんです。

塩見　この頃の年会長は皆さんそう仰います。分子生物学という学問の良さを引き出すのが、年会を開催する意義そのものであったということのようですね。

藤井　おっしゃる通りです。分子生物学会の創立が1978年でしたから、20余年が過ぎたこの頃は成熟期というか爛熟期というか、でもまだ雰囲気としては明らかに右肩上がりの時代でした。参加者9,000人の年会でしたからね。特別講演のほか、シンポジウムやワークショップにも結構外国から人を呼んだんです。全部で60人近くだったと思いますが、その招聘費が大変でして、東薬工（東京医薬品工業協会）と大薬協（大阪医薬品協会／現：関西医薬品協会）へ寄付をお願いに伺ったところ、分子生物学会が薬業界より認定団体として認められ、支援を受けることができた。その寄付金があったおかげで、外国から人を呼ぶことができました。

塩見　ありがたいことに、私たちの2021年会も日薬連（日本製薬団体連合会）にサポートしてもらっています。これは藤井先生のご寄付のお願いが発端だったのですね。

岩崎　分生単体での年会としては、2002年会が最多の参加者だったようですね。

藤井　年会長を引き受けたとき、僕は東北大にいましたから、当初は仙台でやろうと思っていたんですけれど、いろいろと調べてみたら、どんなに工夫しても7,500人が限界だとわかったんです。定年で筑波大へ移った年だったので、僕にとっては横浜開催がちょうどよかったのかもしれません。

塩見　筑波ですと横浜に近くなりますものね。

藤井　ええ。そんな経緯があったので、東北大の皆さんに準備をしてもらって、それに筑波大の人も何人かお手伝いしてもらって。そんな感じでしたので、予想以上に組織が大きくなりました。

塩見　組織委員の一覧を見させていただくと、東北大の皆さんが名を連ねています。

藤井　はい。僕の十年ちょっと前に水野（重樹）先生（1989年会長）が仙台でやっておられて、その時に一般演題が1,000題を超え、「仙台だから“千題”になったんだ」なんて話されていたことを覚えています。2002年会では総演題数が4,000題を超える規模になった。10年少々で4倍になったということです。

塩見　なるほど。覚えやすいですね。先生の年会からポスター掲示を二日間にされたんですね。これはしばらく続いたようです。

藤井　前年にパシフィコ横浜の会場の改修が完了して、展示会場が倍くらいになったので、掲示もディスカッションも少し長めにしてみようということになりました。

塩見　素晴らしいですね。最終日の午後には、中高生や一般の方向けの公開講座『わかりやすい分子生物学と生命科学の最先端　一生き物を遺伝子で語れる時代がやってきた！』を開催されました。榊（佳之）先生がゲノムを話されたとか。

藤井　そうでしたね。その当時は理科離れが叫ばれていて、分子生物学会で何か貢献しようということになり、分子生物学とはどんな学問かに始まり、様々な分野で活躍している4人の先生方にお願いしてやりました。神奈川県教育委員会、NHK横浜放送局、神奈川新聞などの団体に後援してもらい、500人くらいの参加者があったと思います。中学や高校の先生なども熱心に参加されて、たくさんの質問がありました。

岩崎　私もちょうど大学受験をした時期なのですが、理科離れの時代だったんですね。入試や卒業後の就職に関連して理系が敬遠されたというところもあるのでしょうか。

塩見　最近は生物離れなのかなというのがあります。大学を受けるのに、物理や化学だと点が取りやすいからと、生物が敬遠されてしまうんです、高校生に。そういう背景もあり、分生の市民向けの公開講座は例年一般に加え中高生をも引きつける内容となっており、効果が表れることが期待されます。公開講座は大隅典子さん（第18期理事長）が世話人をされたようですね。

藤井　ええ、大隅さんと田村（宏治）さんに世話人をお願いしました。分子生物学会は生物系の学会として当時から女性が活躍していました。

塩見　それでも、正会員の女性比率は20%からなかなか伸びないんです。今、学生会員を含むと35%というところでしょうか。女子学生の比率は悪くないんですけれど、上にいくほど女性が少なくなってしまう。今でもそれが問題なんですよ。

岩崎　これは女性に限らずですが、最近、博士号を取る学生さんが減っているのも問題になっていますね…

塩見　修士で出てしまう子が半分なんですけれど、企業が魅力的なんですよね。修士から研究職に就けるケースも多いので、それでいいんじゃないかと思う学生が結構います。もうひとつ、アカデミアのポジションが多くないというのもありますけど、博士号を取った子も企業が採用するので、アカデミアに残る子が少なくなって。いろんなことが重なって、アカデミアにはなかなか残らないですね。

藤井　経済的なこともあるんでしょうけど、学部でやめてしまうケースもあるのですか？

塩見　私がいる学科では今の所ほとんどが修士には行きますけれど、ドクターには進まず企業を望む子がここのところ多いです。金融やIT産業へ行く子もいます。この状況ですので、いろんなファンディングエージェンシーがそれではまずいということで、学生にもっとサポートをしましょうと動きが出てきました。今後、その効果がどう出てくるかということなんですけれど、良い方向に行ければ、アカデミア志向の学生がまた増えてくるかもしれませんね。そう期待しています。

藤井　僕の頃は、ドクターまでは行かずにマスターまでという人が増えていました。学部の学生はわりあいフレキシブルだけど、だんだんと専門化してくるから、企業としては使いにくさもあると（笑）。当時からそうした企業側の考えが伝わっていました。しかし、そういうことが言われながらも、企業も学生の専門性を大事にするようになるんじゃないかと思われてもいましたけれど、さほど進化はなかったというわけですね。

塩見　先生はPh.D.を取ることに迷いはなかったのですか？

藤井　僕はマスターで製薬会社に行ったんです。それから会社を辞めて、関西医科大学に行ったのちにがん研に移り、そこから東北大に行ったんです。がん研が東京の大塚にあった時代ですが、吉田（光昭）さん（1998年会長）はウイルス部、僕は生化学部で、かなり長い間同じ所で働いていました。

岩崎　企業からアカデミアに戻られた理由というのは、研究の自由さとか、そういう点でしょうか？

藤井　そう、自由さですね、やっぱり（笑）。組織の中に入ると、組織で動くわけじゃないですか。当然そこには指揮命令系統がある。行ってみて、僕には合わないかなと思ったんです。

塩見　企業には企業の魅力があるのはよくわかります。ただ、研究室を率いる立場としては若手研究者がなかなかアカデミアに残らないことを憂いています。学問自体が、たとえば分子生物学だけをやっていればいい時代ではなくなっていて、論文一つ発表するにも、学際的にこれとこれをやってくださいと、色々なことが要求されて、そういった事実もアカデミア敬遠の理由の一つになっているかもしれません。

藤井　それらはどこから要求されるんですか？

塩見　論文を出すとき、レビュアーに回りますよね。そうすると、生化学だけでは足りないから構造もやりなさいとか、生物情報的なこともやりなさいとか、いろいろ要求されます。そうなると、自分の研究室だけではできないんですね。共同研究をやらないと間に合わないような、そういうことが要求されるので、本当に難しくなってきています。若い子たちがそういう苦労を見ていると「あんなしんどいことはしたくない」みたいなのもあって、よくないですよね。やっぱり若手が育たないとしぼんでいきますものね。経済的な支援と、あとは私たちがいかに魅力的な職業なんだっていうのを見せら

れるかですよね。

藤井　だんだん時間が経つと学問自体が古く見られてきますし、最近は特に進展が早いですからね。やっぱりそういう流行もあるでしょうね。

塩見　先ほど、2002年会では60人くらいのゲストを海外から呼ばれたとのことでしたが、学会の国際化についてはどのようにお考えですか？　日本ではポスドクのポジションが相対的に増えてきて、そういう意味で海外へ留学する若手が少なくなってきていると言われています。年会での発表はすべて英語ということについてはどう思われますか？

藤井　それは目的によるんじゃないかと思います。日本人って日本語でまずものを考えるじゃないですか。英語では考えないですよね。だとすると、研究の話をダイレクトにするのは日本語がいいんだと思います。だから、何もわざわざ無理してやるようなことはないと。ただ、外国で自分のことを宣伝しなくちゃいけないので、英語もできたほうがいいのは確かだと思いますね。ともあれ、ちゃんとしたものを持っていなかったら、いくら宣伝したってしょうがないわけで、仕事がちゃんとしていることが最優先でしょう。

塩見　まずは研究者としてのベースが肝心ですよね。先生がおっしゃるように、日本語でやりとりするのも大事だし、しかしながらそれだけだと国際的に自分の仕事を紹介できない。なかなか難しいところですので、我々の今年の年会は半々くらいでやろうと思っています。

岩崎　分生のワークショップも、何だかんだで英語のより日本語のワークショップのほうが質疑も盛り上がっていたりします。

藤井　そうですよ。だってインパクトが違うじゃないですか。でも英語でやると、往々にして考え込んでしまいますよね（笑）。翻訳しないといけない。そうすると、やっぱり日本人同士での英語でのディスカッションは難しいんじゃないかと僕は思いますけどね。

塩見　藤井先生のご研究にとって分子生物学の魅力とは？

藤井　1960年代、分子生物学の勃興期ですね。分子生物学はかなり注目されていました。いろんな大学に生物物理学科や分子生物学科ができたというのもありますけど、当時の時流に乗ったんだと思いますね。分子生物学はバクテリアの分子遺伝学から始まったんですけど、1970年くらいになるともう分子生物学は終わりじゃないかと言われたことがあるんです。それは、バクテリアでできることはもう尽きてしまった。重要なのは真核生物、それも動物細胞の分子生物学だけれども、その頃はまだ方法論がなかったということです。ところが1973年くらいだったと思いますが、異種のDNAを細菌で殖やす組換えDNAの技術が出てきて、動物細胞の色々な遺伝子を細菌で増やして、それを利用して動物細胞の遺伝子の構造の研究が一気に進んだわけです。そのあと、今度は遺伝子改変マウスの技術が出てきて、遺伝子の機能の研究やゲノムの構造ができるようになってさらに研究のフロンティアが広がっていった。そんな時代ですから、夢があったんです。

塩見　先生もそこでシークエンスとかされていたのですか？

藤井　その頃の日本ではまだできるところはあまりありませんでした。僕が遺伝子のシークエンスの仕事をしたのはがん研時代、最初はマクサム・ギルバートの方法でした。1980年のすこし前だったと思います。

塩見　私もそこから入りました。でもすぐにダイデオキシに移行したかな。修士は京都大学で取ったんですけど、その頃は高浪（満）先生（第5期会長）が大きなラボを持っていらっしゃって（京大化研：宇治市）、そこに助手でいらした田畑（哲之）さんに色々習ったんです。

藤井　そうでしたか。高浪先生が日本では最初にシークエンスを広められたのではないですか。懐かしいですね。その当時、京大化研の高浪研で講習会が開かれて、僕も参加させていただいた記憶があります。

塩見　つながるものですね。今後、分子生物学という学問はどうなると思われますか？

藤井　結局のところ、分子生物学はいろんな分野に広がっていくのではないですか。分子古生物学、分子進化学、分子疫学、分子法医学、生物に関係しているものはすべて、それなしには語れなくなっているんじゃないですか。

塩見　学問ではなくて技術なんだっていう声も聞こえてくるんですけれども。たしかに、学問の垣根が鮮明でなくなってきているとは思いますが。

藤井　それは考え方だと思いますね。新しい技術から、新しいものが見えてきて、新しい学問が生まれてくる場合もありますし、技術が進歩すれば合成生物学とか、絶滅したマンモスを作るとか、そういうことまで考えられるでしょう。まぁ、あれは分子生物学だけれど、これは分子生物学じゃない、そんな境界を考えても仕方がないんじゃないですか。

塩見　では先生、分子生物学会の若い人たちにひと言いただけますか。

藤井　なにかと厳しい現実だと思いますが、こういうことをやりたいと思って選んだ研究の道ですから、最後までやり遂げてほしいですね。今も昔も、それなりに大変なことがあるし、不満があるのは同じことだと思います。今の人たちが大変かなと思うのは、世の中が結構裕福になっているという状況です。周りがハングリーだと、自身のハングリーさをあまり感じないんですよ。でも、周りが裕福で自分だけがハングリーだと思うと、それに立ち向かうのは大変です。だからこそ、がんばっていい仕事をしてほしいですね。

塩見　そうですね。いつの時代もハングリーでいなければ。

藤井　もちろん、パーマネントな職が任期制に置き換わった部分があって、それが大きな問題なのだと思いますが、僕たちの若い頃にもそういう話はぽつぽつあったのも事実です。大学が独立行政法人化されたあたりからだんだんパーマネントな職が減っていったことはあると思います。同じ環境の中での落差は大変なことかもしれません。

塩見　もう一つは、運営費交付金というのがほとんどなくて…　一方、研究室のスペースチャージを大学が取るんですよ、これは常々おかしいと思っています。だって、それは雇用主である大学が我々に仕事場として無償提供するもの、ですよね。

藤井　おかしなことですね。昔の講座制の研究室は、教授がいて助教授、助手がいて、一定の研究費は講座費として大学から出ていた。この講座制のよさを知っていて、評価している人はアメリカ人にもいました。しかし日本国内はそうではなかった。講座制の悪い面のみが強調されて、「角を矯めて牛を殺す」ということになっちゃったんですね。運営費交付金を段々減らされて、気が付いてあたふたしている状態ですか。これから先を見据えて、考え直すときかもしれませんね。

岩崎　お金を何とかしなきゃいけなくなると、私くらいの年代ですと1～3年間の研究費が多いので、毎年のように研究費の申請を一生懸命書かなくてはいけなくてなかなか辛いです。

塩見　終わったあとは報告書も書かないといけないですしね。科研費はまだいいですけれど、縛りがかなり強いところもあったりします。

藤井　JSPSの研究連絡センターがあるスウェーデンのストックホルムにいた時にカロリンスカの教授に聞いた話では、報告書は簡単なものしか出さないそうです。カロリンスカでも、いい仕事をしている人たちは、立派な報告書を出さなくても良い研究を続けていると話していました。

岩崎　たしかに。とくに論文が出ていれば、もうそれで十分成果は報告できているんじゃないかとも思いますよね。

藤井　仕事の継続性の重要性が考えられる審査が行なわれないことは大きな問題です。1960年代の頃に教育を受けた人の中から、ノーベル賞を受賞された人だって多く出ているじゃないですか。この先どうだろうって思いますよね。

塩見　すこしずつでも改善するといいですよね。先ほどの、せっかく研究の世界へ来たのだからアカデミアで研究を続けてほしいというのもあるんですけれど、すべての子に希望する受け皿があるわけではないので。大部分は企業も含め、その他の道へとなるのですが、中国あたりを見ているとジャーナルのエディターをやるとか、うまくいっている部分もあるみたいです。それが日本ではまだ少なくて、そういう職業の多様性というのも、今後日本は考えていかなくてはならないと思います。

藤井　やっぱり、育てた人にはそれを活かしてもらいたいというのはありますね。

塩見　そういう子たちが別の業界へ行くのは、それもいいんですけれど、もったいないかなという気がしてしまって。優秀な子ばかりですので。そういえば、先生がいらした時、ここ（東大理学部3号館）ってまだなかったんですよね？

藤井　いえいえ、私共が最初です。3号館が出来てすぐに入ったんですから。

塩見　あら、そうでしたか。

藤井　懐かしいです。今日は少し早く着いたから、近くをゆっくり歩いてみました。ここは、できた当時からコンクリート打ちっぱなしの建物で、安っぽい建物だなと思っていましたが、いまだにもっているというのは、奇跡に近いんじゃないですか（笑）。

塩見　以前、堀田（凱樹）先生が分生キャリアパス委員会の打合せにいらしたとき、「安普請だな～」ってぼやいていらっしゃいました（笑）。

藤井　私のいた研究室は一階の向こう側でしたよ。

岩崎　今、美喜子さんが使っている部屋ですね！

塩見　藤井先生、この後、ぜひ寄って行ってください！今日はありがとうございました。

藤井 義明（ふじい よしあき）
1938年生まれ
第25回（2002年）年会長
第12期評議員

1965年　東京大学大学院化学系研究科修士課程修了
1965年　三共株式会社中央研究所
1975年　関西医科大学　講師
1977年　癌研究会癌研究所　主任研究員
1986年　癌研究会癌研究所　部長
1987年　東北大学理学部　教授
1997年　東北大学大学院理学研究科　教授
2001年　東北大学大学院生命科学研究科教授
2002年　東北大学　名誉教授
2002年～2009年　筑波大学先端学際領域研究センター　客員教授
2011年～2013年　日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター　センター長

第30回（2007年）年会

山本 雅 年会長インタビュー

日 時：2020年6月25日（木）15：00〜16：45
場 所：東京大学 本郷キャンパス 理3号館

塩見　山本先生の年会はとても華やかでしたね。参加者数も過去最多、企業ブースもすごくにぎわっていた印象です。

山本　ありがとうございます。私がポスドクのときに参加した年会で一番大きかったのがASCB（American Society for Cell Biology）でした。アメリカの細胞生物学会だろうと思っていたらとんでもなくて、遺伝学から生化学から、全部あるんですよね。自分の研究領域以外にも色々なところがみられて、ああいう雰囲気の年会にできたらと思ったんです。もちろん、コンパクトな規模の専門学会も大切だと思います。でも、日本の生命科学を一堂に会する意義というか、そういう場所が必要だと感じていました。それと、だいぶ昔の話になりますが、分子生物学会が生命科学全体をみようという動きがありました。分子生物学会は遺伝子を背景に発展してきた学会ですが、糖質や代謝など一番遠いところの領域を含めることで生命科学のほとんどがカバーできるんですね。年会長を引き受けてそんなことを思い起こしていると、私と同じ2007年に生化学会の大会長に決まっていた清水孝雄先生も近い考えをお持ちということがわかって、五日間の会期で合同大会を開催することになりました。

岩崎　分生の年会アンケートによると、合同開催については賛成と反対それぞれのご意見があるようですね。その後も何度か合同でることがあったのは、合同大会の試みがよくて、魅力を感じた方もいらしたということでしょうか？

山本　分子生物学会と生化学会、大きな学会へ二度も出張したくないという方がいる一方で、いずれの学会にしか入っていない方からすると、そもそもそういった議論は関係ないという意見もありました。当時の評議員会には富澤純一先生（名誉会員）も出席されていて、眼光鋭く厳しい表情でおられたけれども、「しっかりとした考えがあるなら合同もよし、ただし、いい加減にやってはいけない」というようなご意見をいただいたものと解釈しました。翌2008年も、長田重一さんが生化学会の大隅良典さんと合同で開催することになりましたね。最近では、2017年にConBio（生命科学系学会合同年次大会）という新しい形態がありましたが、こういう枠組みもいいと思います。

塩見　マスターズレクチャーなる企画、錚々たる顔ぶれでした。

山本　分生はあまりプレナリーをやらないんだけど、生化は毎年やっているんですよね。だからバランスをとって特別講演を大会長企画のプレナリーとして開催したんです、名称にも注意を払って（笑）。また、教育的な講演という意味合いもありました。山梨裕司さん（庶務幹事）や井上純一郎さん（プログラム幹事）はじめプログラム委員の先生方がうまく編成してくれました。なんせ五日間を運営するわけですからね。

岩崎　朝から目の醒めそうなプログラムですし、スーツで参加された方が多かったのでしょうか？　自分が初めて座長をすることになったとき、ちゃんとしていたほうがいいかなって、スーツで臨んだときのことを思い出しました。

山本　いやー、ジーパンが多かったんじゃないかな（笑）。分生の年会は日本では珍しく国際学会のようにわりとみんなラフで、昔からジーンズでしたよ。若者にとってもそういう敷居の低いところが分生のよさでもあるんです。私はOISTへ移ってから日本人の若手とじっくり話す機会がだいぶ減ってしまったけれども、最近の年会はなんとなく国際化が進んでいる感じがありますね。英語での発表が増えているんですか？

塩見　第21期の理事長だった阿形さんが年会の国際化を推進したのもあって、2019年会の佐々木年会長によってT字型プログラムが組まれました。会期を通して（横に）英語セッションがあり、二日目は丸一日（縦に）英語のセッションがあることから、これをT字型プログラムと呼んでいます。必ずどこかに英語での発表があるように組まれているので、英語圏の参加者も全日程を楽しめるようになりました。

山本　若手にとっても刺激になっていいじゃないですか。やはり若手を育てること、若い学生さんのサポートは特に大事です。年会での取り組みとは異なりますが、私の所属するOISTでも基礎生命科学の分野で研究している先生がいるので、臨床のMD-PhDコースを走らせて学生さんに来てもらうための積極的なアプローチをしたり、インターンでもアプライできるようにしています。運営費交付金が減っているなか、競争的資金をベースにした方針だと若手はきついですよ。

岩崎　慶應の医学部でも、学生さん、特に学部生が外で研究しやすいようなインターンシップを活発化しようとしています。夏休みのスケジュールを組み直すなどして。そういう制度的なものがうまくまわり始めると、OISTだったり、学生さんの受け入れがしっかりしているところとの連携も進むように思います。また、チャレンジングな研究提案への長期支援型の研究費「創発」が2020年度にスタートしました（https://www.jst.go.jp/souhatsu/）。ちょうど独立するくらいの若手向けの支援事業で、原則7年間（最大10年間）という長期の支援は初めて。研究者の多様なキャリアパスやライフイベントを考慮した運営が期待されています。

塩見　そう、きめ細やかな制度設計が大事ですよね。地方大学のきびしさは年々だし、このあたりもどうブーストしていくか私たちの世代が考えなければいけません。

山本　OISTも女性をターゲットにしたポジションを用意したり、色々とやっていますね。ただそれでも、残念ながらなかなか女性が増えていないのが実情です。社会のサポートシステムがかなり追いついてきているんだけど、子育て時期のサポートがまだ万全でないということかな。だからこそ、育てないといけないと思いますね。私のところに、きわめて優秀な女性の学生さんがいたのですけど、ポスドクになる前に国へ帰ってまず結婚すると言ってね。一度は引き留めてみたけど、こればかりはご本人の意向を尊重しなければいけません。この学生さんは、お相手を国に残していたわけですが。

岩崎　子育て時期のサポートについてはそのとおりですね。出産や育児で研究からいったん離れてしまうと、次のチャンスにチャレンジするハードルもなかなか高くなってしまうように思いますし…

塩見　アメリカやヨーロッパだと、PIの女性比率が日本より低いなんてことはありませんから、日本の制度にはいくつか原因となっていることがありそうですね。

山本　10年以上前のことだけど、私がアメリカにいたころのボスに『The Female Brain』という本を紹介されたんです、男性のボスにですよ。実は彼も奥さんに読むよう勧められたらしく、女性の脳と男性の脳とで異なる重要なポイントについて説明されていて、女性がどう考え、何を大切にし、どのようにコミュニケーションをとり、誰を愛するのかを明らかにしようとしています。それを読んでから私も奥さんの考え方が以前よりわかるようになったし、夫婦円満の秘訣となったのかもしれません（笑）。優秀な女性はたくさんいるわけですから、そういう人材が社会で活躍できるようにしなければいけない。ブレーキをかけながらでも、フルに力を発揮できるようなことをうまく示してくれたらいい。おそらく、そういう女性が今も活躍されているんじゃないですかね。

岩崎　女性にも男性にもタイプは色々なので、グイグイ引っ張るようなリーダーではなく一緒に伴走するタイプを目指すとか、そういうリーダー像もうまく広まっていくといいですね。私もいけるかもしれないと思える女性が増えることを願って。

塩見　山本先生は日本の分子生物学をどのようにみてらっしゃいますか？

山本　もちろん環境的なこともあるけれど、遺伝子がすべてを支配しているんじゃないかという考えが私にはあって、ゲノム科学を含む生物学全般、生命科学全体をみるのが分子生物学会だと思ってるんですよ。だから、冒頭でもお伝えしたように、生命科学オンパレードみたいな雰囲気の年会をやりたかったんです。塩見さんも然り、年会を任された方がそれぞれの個性をもってやってみるのがいいですよ。

岩崎　分子生物学会のいいところだなと思うのが、自分が普段いかないような分野の発表まであるから、参加費を払って専門学会へ行って聞くほどでもないようなとき、分生なら隣の会場で聞けるなんてこともありがたいんです。横浜は会議センターと展示ホールも近くて便利な会場ですし。

塩見　近藤滋さんのとき（2013年会）はジャズとか落書きまであって、すごく特徴的な年会だったんですよね。私はあそこまではやれないけれども（笑）、山本先生がおっしゃるように何か印象的なことをやってみたい気持ちがあって、ちょうど私で10回目の横浜開催というご縁もあり、また、もしかしたらこれが分生にとって最後の横浜年会になるのかも、ということで、これまでお世話になった横浜への感謝の気持ちも込めて「横浜ヒストリア」と銘打った企画をやってはどうかと思いたちました。

山本　いいネーミングですね。そういう企画は分生でも初めてなんじゃないかな。

塩見　では最後に、日本の生命科学の将来について、お願いします。

山本　AIは分子生物学と共存しやすいパートナーになるんじゃないですかね。メンタリティーには入ってこないかもしれないけど、テクニックとして絶対必要だし、生物学特有のネットワークを理解するのにAIは打って付けですよ。膨大な情報をいかに数学の力で解き進めていくか。

岩崎　最近は解析技術もめざましい進歩を遂げているので、得られる情報の量がすごい。だから、コンピュテーショナルなアプローチを入れていかないと処理しきれません…

山本　そうそう、システムバイオロジー的な手法で、すこしデータを見やすくしてくれないと、なかなか次が考えられないケースもありますよね。生物現象が、AIとの相性がいいことの裏返しだと思います。

塩見　そうなると、そういうことも念頭に学生さんを教育していくべきでしょうか？

山本　重要なのは、先端技術を使いこなせる方が、生物現象を理解したうえでやってくれるかどうかですね。それを前提としないと、とんでもない方向へ行ってしまうかもしれない。表面上のことだけでなく、そういうことをしっかりと理解したうえで研究に従事するには、領域を網羅する分子生物学会、分生年会のような場が生物学にはますます必要だと思います。

塩見　山本先生、本日は興味深いお話をありがとうございました。

山本 雅（やまもと ただし）
1947年生まれ
第30回（2007年）年会長
第11、12、14、15期評議員

1972年　大阪大学理学部卒業
1977年　大阪大学大学院博士課程修了
1977年　米国ＮＩＨ癌研究所　研究員
1980年　東京大学医科学研究所　助手
1986年　同　助教授
1991年　同　教授
2003年　同　所長
2003年　東京大学　評議員
2007年　東京大学医科学研究所癌・細胞増殖部門　部門長
2012年　沖縄科学技術大学院大学　教授
2015年　理化学研究所統合生命医科学研究センター　センター長（非常勤）
2016年　同　チームリーダーを兼務
2019年　沖縄科学技術大学院大学副学長・教授

大会長挨拶

第30回日本分子生物学会年会
年会長　山本　　雅
（東京大学医科学研究所）

第80回日本生化学会大会
会　頭　清水　孝雄
（東京大学大学院医学系研究科）

日本分子生物学会および日本生化学会は，この度，2007年度の年次大会を，第30回日本分子生物学会年会・第80回日本生化学会大会 合同大会（BMB2007）として，12月11日～15日までの5日間，横浜にて開催いたします。

両学会はこれまでにも，合同となる会を開催いたしましたが，本合同大会は，両学会の年会の代表が同一人であった場合を除き，両学会が自発的に企画・開催する初めての国内年次大会となります。

合同開催の理由は大きく二つあります。第一は両学会がそのカバーする領域が重なっていることであります。もちろん，それぞれの学会に特徴がありますが（例えば，分子生物学会では遺伝学，モデル生物，生化学会では糖質・脂質や代謝学，ケミカルバイオロジーなど），両学会員が交流することで新たな研究分野の発展が期待できます。第二は，近年，学会，シンポジウムなどの数が多く，これに参加する会員の経済的，時間的負担が大変大きくなっている現実があります。本来，学会は単なる情報を得る場ではなく，人と人とが交流し共同研究の可能性などを探る機会ですが，これを損ないかねない位，学会が多いという現状もあります。これらの現状を踏まえ，両大会長を中心に多くの話し合いを持ち，検討を重ね，本合同大会開催を実現するに至りました。

大会プログラムについても，両学会の特徴を活かし，出来る限り幅広い領域をカバーすべく，様々な工夫を凝らしました。一般演題では，お陰様で会員の皆様よりたくさんの演題投稿をいただき，7月に締め切った演題の投稿数は5,500題を超えました。全プログラムをあわせると，本大会では国内外の研究者による約7,000演題の発表が行われる予定です。

生命科学分野で国内最大規模となるこの合同大会は，従来個々で開催してきた年次大会では成し得なかった成果が得られることが期待されます。この合同大会によって，両学会員の交流が促進され，学会という枠を超えた情報の交換と研究者の交流が図られるでしょう。また，両学会に所属していない研究者や学生，さらに海外の研究者からの関心・参加をも集め，本研究分野に新たな広がりを生むだけでなく，日本の生命科学の進め方に少なからぬ影響を与える可能性を含んでおります。

会員の皆様はもちろん，現在は両学会に入られていない方も，是非この機会にご参加いただき，日本のライフサイエンス分野を代表するこの二つの学会をより発展させるべく，新しい風を送り込んでいただければ幸いです。

第32回（2009年）年会

小原 雄治 年会長インタビュー

日 時：2021年7月27日（火）16：00～18：00
場 所：東京大学 柏の葉キャンパス駅前サテライト6階 DBCLS柏ラボ

塩見　小原先生が『分子生物学会の原点―すべては議論から―』というテーマを掲げた2009年会は、のちの分生年会に大きなインパクトを残した年会となったのではないでしょうか。このテーマの真意からお聞かせください。

小原　分子生物学会の年会は、やはりこの学会のアイデンティティーそのものであるように思います。分生年会に行けば生物学研究の世界の新しいことがわかる。いろんなことを見聞きしたい人が一堂に集まって、ボーダーレスにワイワイ議論するから自ずと先端がわかってくる、そんな雰囲気がありました。会員数がうなぎのぼりだった時期には、若手が多く参加する分生の年会はまるでマスターの練習台で学芸会のようだと揶揄する人もいましたけど、分生がエッジの効いた人の集まりだとわかっている人からすれば、それも含めての分子生物学会なんですよね。たしかに、学会の規模が大きくなったことで、年会でいろんな人に会うのが少しずつむずかしくなってきて、これはもったいないなーと思っていたところに年会長の指名を受けました。私になったのもいろいろ経緯があるそうですが、とにかく対面で議論することが分生の基本スタイルなので、それを年会で実現したいと。だから、「議論」という学会の原点に戻る意味合いが必然的にあって、分子生物学会がなんなのかを若い人に知らせないといけない、テーマとしてはシンプルにそれだったんです。その点で、横浜の会場は理想的です。ポスター会場は大きいのが一つですから、その日に参加している人がそこに集まれば年会全体が盛り上がるんじゃないかと。宣伝用のポスターもシンプルにしたんですけど、「これは下書きですか？」って言われたくらいでね（笑）。まぁ、単独にせよ他学会と合同でやるにせよ、分子生物学会の基本を土台にすること、それに尽きるんですよ。

塩見　先生の年会では大きく4つのコンセプトがあったようですね。メインテーマに通ずる「議論すること」、そして「IT化」「国際性」「社会性」、さきほどのお話に関連して、ポスター討論におけるディスカッサー制について伺えますか？

小原　分生の一般演題と言えばポスター発表ですが、ポスターって若い人が徹夜して作ってくるものなんですよ。このせっかくのポスターの討論を活性化するため、年会に参加する会員にディスカッサー役をお願いすることにしたんです。なんでそんなことするのかって意見も結構ありました。本来は自然に議論されることが望ましいのですけど、議論することを前面に押し出すためにも導入したかった。違う分野のポスターでもきちんと聞けば結構おもしろいですよね。だからそれをディスカッサーに体験してもらうという実験的な側面もありました。組織委員会の荒木（弘之）さん、深川（竜郎）さん（2022年会長）、小林（武彦）さん（2025年会長）ががんばってくれて、いざ年会が始まってみると、ほとんどのディスカッサーが時間通りにちゃんと来てくれたし、一生懸命に議論する若手を見て嬉しく思いましたよ。ディスカッサーを引き受けてくれた人たちからも、「楽しかった」、「思いがけずおもしろかった」という意見が多かったですし、導入してよかったと今でも思っています。「こんな先

生と議論したんだ」みたいに若手が喜んでくれて、シニアの先生が活躍してくれるのも嬉しかったんですよ。

岩崎　歴代の年会長にインタビューしたり、年会のアンケートをみたりして気付いたのは、ディスカッサー制はポスターの発表者をエンカレッジするだけでなく、ディスカッサーとして議論することを楽しんでいる方も多いということです。まさに分生という感じがします！

塩見　そういうことですよね。『すべては議論から』、シンプルに分子生物学会を表していて、これからも大事にしなくてはならないことですよね。

小原　ポスターセッションの時間帯は他に一切のプログラムを入れない、それによって参加者がホールに集まるような仕掛けにしました。ポスター・展示会場に行きさえすれば、旧知の友人に出会えるし、食べ物だってあるし、無論、企業展示にとっても1か所に固まっていて効果的。ポスターを最後の時間帯にしたので終了後も延々と議論が続いてました。そうそう、ポスターとポスターのあいだに椅子を置きました。背もたれのない椅子ですよ（笑）。そのスペースを確保するために間隔をとる必要もあるんだけど、座ってポスターが見られるし、議論がしやすいんですよ。これはちょっとした小技だけど、すごくよかったと思います。

塩見　私も毎年椅子があるといいなーって思うんですけど、どういうわけか空いているのはいつも隅っこで（笑）。このコロナの状況だから、対策としてできることをしっかりとやって、是非ポスターを盛り上げたいと思います。そのポスター発表も含め、2021年会はハイブリッドで準備を進めていますが、IT化・オンライン化についてはいかがでしょう？

小原　当時はまだiPhoneが出たばかりで、基本はPCでネットに接続してダウンロードする時代だったからね。今から考えたらまだまだでした。パケット代って言うんですか、携帯電話のネット使い放題の契約をしていない参加者もいて、このあたりの注意喚起もおこないました。

岩崎　年会にパソコンを持ち込んで有効活用するためには、Wi-Fi環境が必須ですよね。

小原　電話帳かと思うくらいの要旨集を持ち歩くのは拷問でしたから、なんとかならないのかってことで要旨集のオンライン化に踏み切りました。印刷や発送にも結構な費用がかかりますからね。とにかくあれを持たせたくなかった（笑）。

塩見　分生は全会員にプログラム集を送っていましたが、今年はそれもやめて、年会のシステムをより効果的に使ってもらえるようIT化をより進めています。国際性も、ITの進歩によってメリットが見い出されたひとつでしょうか。

小原　2009年会のシンポジウムは指定企画・公募企画とも英語にして、各セッションに複数の海外演者を招聘してもらいました。塩見さんにもオーガナイズしてもらったけど、海外の研究現場でファーストオーサーとして論文を出しているような若手のPIやポスドクを必ず二人は呼んでもらうというものです。来てくれたシンポジストには、ポスター会場に設置した『Meet the Symposists』のコーナーで日本の若手と語り合ってもらい、その日だけは飲みに行く時間をちょっと遅らせてもらって（笑）、ポスターセッションにも参戦してもらいました。年会としては、このあたりの国際性を担保するために、ポスターも要旨は英語での執筆を推奨して、おやっと思ったら立ち止まってもらえるようにしました。組織委員会でもいろんな話が出たけど、我々が韓国の学会へ行って、ハングルで書かれたポスターを前にしたときの絶望感を思い出してくださいってことなんですよね。なにもできない。だからせめて英語で書いてよというわけです。ただ意外にも、年会の英語化については若い人よりPIにネガティブな反応が多かったんですよ。

塩見　2009年会当時はって感じですかね。今年はありがたいことに、ワークショップも積極的に英語でやってくださる方が多いです。

小原　プレナリーはやりませんでしたが、みんなで聴く、共有することも大事ですから、そういう視点ではやってもよかったかなと思うところです。ただ、ノーベル賞をとったような人は飛行機代もばか高くかかります。会期前日のパーティーみたいなこともやめましょうと。そのかわり、第一線の若手を海外から多数呼ぶのにお金を使いました。ポスターにも参戦してもらい、年会での議論を重視するためでした。

塩見　明確なメッセージですね。ここ数年、国際化を検討している分生年会も言語は悩ましいところですが、ポスターはタイトルと要旨で英語を推奨して、討論の言語は自由にしてしっかり議論するというあたりがよさそうです。では、社会性についてはいかがですか？　日本の女性研究者の状況、あまり変わってないんですよ。

小原　なんでなんですかね。僕は大学院から岡崎（令治）研なので恒子さんがボスですし、そのあと線虫の研究に移ったら世界では女性のほうが優秀な人が多い。国内でも活躍している人が多いです。だからあまりピンときてなかったんですけど、まだ日本はダメですか。

岩崎　なんでなんでしょう。インタビューのたびにこのお話を伺うのですが、結局なんなんだろうねってなっちゃうんです…

塩見　ある著名な方が仰っていましたけど、日本のいまの状況だと、女性の活躍が成長の柱とか国がいくら言ってみたところで、大学も企業も3割なんて到底無理、せいぜい2割強がいいとこだそうです。一つは、母集団の小ささ。我々の領域を見ても然りで、若い年齢層は結構いるけれど、上にいけばいくほど減る。階段から女性が故意に降ろされているわけではないだろうから、むしろ女性自身が階段を上がらないか、降りてしまっている。若手向けの支援は文科省も一生懸命になっていろいろとやってくれているんですけれどね。

小原　個々の研究者はしっかり研究をやって

いるのに不思議ですよね。女性も若手も、この問題には年会というより学会が手を打つべきで、分生としてはキャリアパス委員会を中心に継続的な活動が今後も必要でしょうね。

塩見　これは現委員会メンバーの由香さんたちに頑張ってもらいましょう。年会に参加する学部学生の参加費が無料になったのも2009年会の試みだったのでしょうか？

小原　マスターには行くけどドクターまでは行かないというような状況が出てきていたので、学部のときにおもしろい体験をしてもらったほうがいいんじゃないかと考え、学生会員になっている学部学生を意識して思い切ってやりました。学会デビューもそうでしょうけど、若い頃に見聞きしたことって残るじゃないですか。学会っていうのがどういうものかを知ってもらうだけでもいいと思うんですよね。

岩崎　学生は嬉しいと思います。私も学部の頃から年会に行きたかったんですけど、自分の発表がないと研究費でってわけにはいかなくて。

塩見　このコロナ禍では、若手研究者や学生さんの心をくすぐるようなものが減ってしまっているものね。

岩崎　ポスターやトークを聴いたりして、いつか自分もこういう発表がしてみたいとか、特に若手はそう思うだけでやる気も出てきますよね。

塩見　学会の場で発表すると自分自身もエンカレッジされるし、先生が言われたように、生の、つまり対人の体験を通して学ぶことは大きいです。ナショナルバイオリソース（NBRP）のような展示も分生年会に欠かせない体験コーナーと言えますね。

小原　僕はNBRPに関わっていて、宣伝のためにNBRPが始まった翌年の2003年会からやってきたのですが、実物展示がポイントです。みんなDNAや遺伝子は知っていても、その生き物のことはあまり知らないんです。その生き物の大きさのイメージもわかないだろうし、ホヤとか優れたモデル生物（仙台などで食べるホヤとは違います）だけど見たこともないでしょう。でも実物見ると、いろいろ疑問やアイディアが湧いてきます。見るだけでも楽しいですし。この最初の展示で一番盛り上がったのが出展しているNBRP担当の研究者どうしです。隣のリソースの実物初めて見たと。これは学会員に是非実物を見せないといけないと思いました。

岩崎　私たちも培養細胞や配列データ解析をメインで研究していると、個体を扱うことは少なくなりますし、触れる機会がないモデル生物って意外と沢山あるように思います。研究分野や世代を問わずよい取り組みですね。高校生発表に参加した高校生たちが興味津々な感じですごく喜んでいたのをよく覚えています。

塩見　今年の市民公開講座は、小林さんと胡桃坂さんが趣向を凝らした企画を検討してくれているから（笑）、高校生にもたくさん参加してほしいな。2009年会の市民公開講座は最終日でも会員の参加が多かったですよね。

小原　僕のときも小林さんにやってもらいました。市民の方も参加しやすいように事前の参加申込を不要にして宣伝しました。余興的な雰囲気も多少はあったと思いますが、話はサイエンスの内容でした。タレントさんの力もお借りして、結構な人が入りました。

塩見　初日の夜に開催した緊急フォーラム『事業仕分けから日本の未来の科学を考える』も反響が大きかったようですね。

小原　ちょうど政権交代が起きて、行政刷新会議が行う事業仕分けが連日報道されていました。科研費はいったいどうなるんだってことだったので、当時理事長だった岡田清孝さんと文科省や内閣府へ陳情に行って、行政の立場からも緊急フォーラムに参加してもらいました。分子生物学会としては、多くの会員から文科省の学術政策を危惧する意見が出されていたので、これらをパブコメとして冊子にまとめて配布したんです。本当に時間がなかったけどよくまとめてくれたと思います。余談ですけど、事業仕分けって、だだっ広い会場を仕切って、ザワザワしているところでヘッドフォンとマイクを使ってやってましたよね。このカタチで広い場所でワークショップを並べてやったら盛り上がるんじゃないかなって思ったんですよ（笑）。当時は音響や照明など設備的にも障壁がありましたので無理でしたが、分生くらいの規模だと、隣接する講演会場が近いのはすごいメリットです。講演を聴いた会場のすぐ横でポスターが見られるとか、企業展示やポスターも導線的によさそうですよね。巨大学会ゆえのスケールメリットが出せるのではないか、これは深川さんがチャレンジしてくれるようです。

塩見　以前は口頭発表でも喧々諤々の議論とかありましたよね。でも今はお行儀がよくなってしまったのかもしれないから、そういうのも新しくってよいと思います。

小原　「大変おもしろい話をありがとうございました」みたいな枕詞から始める人が多いですね。ちょっと行き過ぎてしまっているのかもしれませんね。ズバッと質問したほうがいいと思います。ディスカッサーの場合は、ある程度キャッチボールになるからそういう風にはならないですよね。口頭発表でもそういう雰囲気でやったらいいと思います。

岩崎　言わないと、発表者におもしろくなかったってメッセージが伝わったらどうしようみたいな感じがあるのかもしれませんね（笑）。面白くて興味があるから質問しているのだから、あえて言わなくてもそこは伝わって欲しいところですが。

塩見　いい子でいないと次がないみたいな、そういうよくない感じが蔓延してしまってはもったいないですね。でもそんなのどこ吹く風で、いろんなよい実験をされた2009年会は先生にとってどんなものでしたか？

小原　組織委員会のコアメンバー（荒木さん、深川さん、小林さん）が遺伝研だったから、事

務局に来てもらえば所内で完結できてね。結構な長時間、膝を付け合わせてアイディアを煮詰めていたのが思い出されます。その後の年会につながって、またやっていただいたこともあるので、実験をさせていただいた者としてはありがたく思っています。分子生物学会ができた頃、一番の年長者だった渡邊格さん（初代会長／名誉会員）も現役、中心メンバーはほとんど40代でみんな若かった。分生は当時から年会でも分け隔てなくやっていたから、僕もそういう感じでやらせてもらいました。分子生物学って、新しい攻め方や戦略、そのための新しい方法論とか技術とかで生命の理解を進める、そういう学問なんですよね。だから、ファージから始まった学会が高等生物にいくのは当然のことだったし。他の学会を飛び出してきた奇抜な人たちが作った学会だから、そういう奇抜な若手が出てきてほしいな。

塩見　では最後に、そんな私たちの2021年会へエールをお願いします。

小原　分子生物学会の皆さんはとにかく議論が好きなんですよ。シニアから若手まで世代を問わず、それは今もひしひしと感じています。オンラインにも、海外からも参加しやすいなどいい面がありますから、うまいことハイブリッドのバランスをとれればよいですが、コロナ禍でオンラインがよいこととオンラインではだめなことがはっきりしたと思います。分生ならではのエビデンスをベースにした感染対策をして、ぜひオンサイトで多くの参加者が集まれるようになればいいなと思います。対面で議論するサイエンスにみんなが本当に飢えてますから。

岩崎　特にポスター発表や企業展示などは、歩き回ってフラっと立ち寄った際に良い出会いがあった、といったことも多いと思います。そういった意味でも、やはりオンラインでは補いきれない良さが対面にはあるんじゃないかと思います。

塩見　分生は今年の年会どうするんだってみられているでしょうしね。気を付けつつ、いいところを取り入れて、なんとかオンサイト参加者の比率を高めてやり切りたいと思います。

小原　いろんな学会と合同でやってみるのもいいと思いますし、いつか、日本の生物系の学会が合同で何か考えましょうっていうのがあってもいいでしょ。やっぱり年会には人が集まってなんぼですし、学術集会をやることが目的なんですからね。ポリティカルなこととは別で、仲間に会って議論したいという感覚を持つ会員のために年会を開くことが本質で、オンサイトで議論できる場を提供するのが学会の使命なはずですから。

塩見　ありがとうございます。頑張ります。

小原 雄治（こはら ゆうじ）
1951年生まれ
第32回（2009年）年会長
第17期理事長、第18期副理事長、
第14、15、20、21期理事

1974年　京都大学理学部卒業
1979年　名古屋大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学
1980年　名古屋大学理学部　助手
1988年　英国MRC分子生物学研究所客員研究員
1989年　国立遺伝学研究所遺伝情報研究センター　助教授
1996年　国立遺伝学研究所構造遺伝学研究センター　教授
1998年　国立遺伝学研究所生物遺伝資源情報総合センター　センター長
2004年　情報・システム研究機構国立遺伝学研究所　所長
2012年～　情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター　センター長
2013年～　情報・システム研究機構国立遺伝学研究所　特任教授

年会長挨拶

第 32 回日本分子生物学会年会は本年 12 月 9-12 日の 4 日間、横浜にて開催いたします。今回は「分子生物学会の原点ーすべては議論からー」というテーマといたしました。

分子生物学会の年会は合同年会も含め例年盛会で、参加者も数千人に及ぶようになりました。しかし、巨大になったがゆえに十分な議論が出来ない、いろんな人に出会いにくいということが起こっているように思います。分子生物学会年会のよさはやはり学生から大先生までが分け隔てなく「議論すること」に尽きるのではないか、そして年会に行けばいろんな人に出会えることだと思います。本年会の企画にあたり、これらの点を何とかできないかと考えました。これに「国際性」を加えて 2 本柱とし、避けて通れない「社会性」、方法論として「IT の活用」についても考慮いたしました。

「国際性」については、各シンポジウムに分野の第一線で活躍している海外の PI を 2 名以上招いてもらいました。国際水準の議論を期待したいと思います。また、ポスター会場に「Meet the Symposists」のコーナーを設け、当日のシンポジストと議論できる場を作りました。さらに、シンポジストには時間が許す限りポスターセッションにも「参戦」してもらいます。このためにシンポジウムは要旨・講演ともに英語とし、その他はポスターを含め要旨は英語での執筆を推奨いたしました。

「議論」の活性化のためにはポスター会場での発表／討論を重視しました。多くのポスターは若い人が徹夜をして作ってきたものだと思います。それを十分に活用しない手はありません。そこでポスターセッションのなかにディスカッサー制度を企画いたしました。すべてのポスターについて、経験豊かなディスカッサーが分担して発表者に対して議論をふっかけていただきます。組織委員会でも賛否両論がありましたがあえてやってみることにしました。これらのこともあり、ポスターセッション中は他の企画は一切入れず、1 時間延長し、その後にミキサーも予定しております。横浜会場はポスター発表を一つの会場で行えますので全参加者が一同に集うことになります。熱い議論が続くことを期待しております。

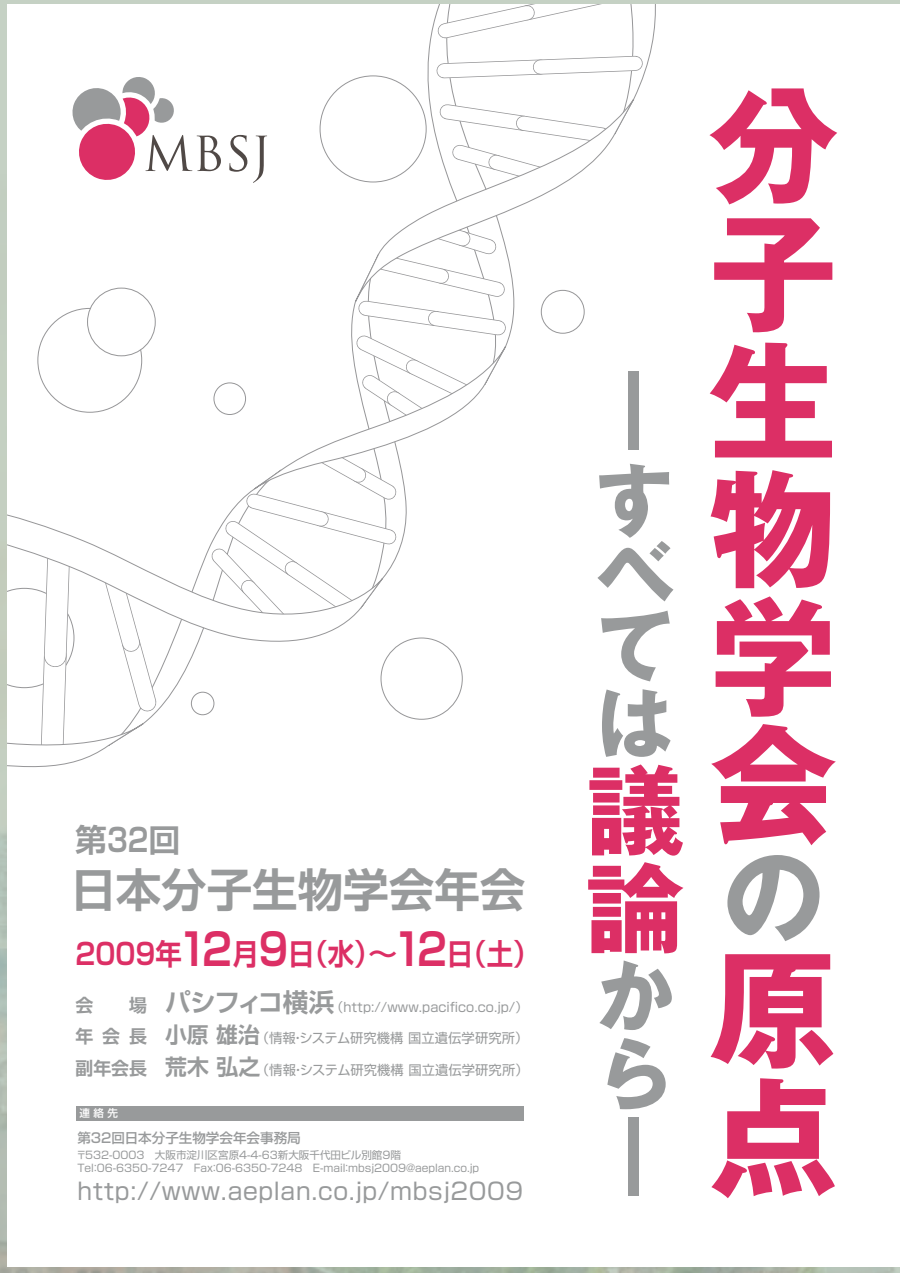
「IT の活用」については、今回思い切って要旨集はオンライン化し、印刷物はやめることにしました。プログラム集はこれまでどおり印刷物を作成・送付しますし、参加登録者はパスワード・ID を用いて年会ホームページから事前に要旨等の閲覧・検索・ダウンロードができます。会場では PC・携帯電話にて検索・閲覧・その他サービスを利用できるようにいたします。いろいろな活用が考えられると思います。

「社会性」につきましては、男女共同参画、若手倫理教育、さらにはポスドク問題に対応して企業の人や研究者以外の人たちとの接点創成など、様々な企画をサイエンスセッションとのバランスを考慮しつつ企画いたしました。また、横浜近辺の高校生の見学企画も進行中です。恒例になりましたナショナルバイオリソースプロジェクトの実物展示も行います。

次世代シーケンス技術やイメージング技術に象徴されるように、生命科学は大きく様変わりしております。第 32 回日本分子生物学会年会が実りある議論・情報交換の場となり、分子生物学の更なる発展のきっかけとなることを期待し、横浜で皆様とお会いできることを楽しみにしております。

最後に、これまでに多くの方々からいただきましたご協力に対して厚くお礼申し上げます。

第 32 回日本分子生物学会年会長
小原　雄治



第34回（2011年）年会

花岡 文雄 年会長インタビュー

日 時：2021年9月18日（土）15：00〜16：45
場 所：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 総合医科学研究棟

塩見　花岡先生の年会はちょうど10年前でした。ではまず、『分子からヒトへ ―メカニズムを知り、コントロールする』のコンセプトからお伺いします。これは先生が付けられたのですか？

花岡　普通はそうですよね（笑）。実はこのキャッチコピー、組織委員長の永田恭介さんが考えてくれたんです。それで、『基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学』をテーマとして、彼に年会全体を取り仕切ってもらって、コアメンバーの人選なども永田さんが考えてくれました。

塩見　財務委員長というポジションもあったんですね。

花岡　はい、分生の年会は何と言っても企業協賛で成り立っていますから、運営会社へ丸投げするのではなく、組織委員会に財務委員長を置きました。私たちが声をかけやすい企業さんもありますし、協力を得るために企業まわりもしました。そういうことでお金を工面することによって、年会をやった充実感を得ることもできました。

塩見　素晴らしい取り組みですね。いまはコロナの状況もあったりして、私たちも企業さんにダイレクトにお願いすることを続けています。2011年会は、会期の9か月前、東日本大震災に見舞われました。10年ってあっという間ですけれども、震災への対応は本当にご苦労されたと思います。

花岡　もちろん、年会開催に向けて私たちも大変なことはありましたけど、被災地の方、被災された方はとんでもない経験をされたわけですからね、私たちとしては分生年会でやれることをやろうと。企業のなかには大きな打撃を受けたところもありましたが、早めに準備をしていたのが功を奏して結果的に大きな影響を受けずに乗り切れたと思います。財務を担当した菅澤薫さんの頑張りと、呼応してくれた企業さんの協力が本当にありがたかったです。

岩崎　参加者には影響がなかったのですか？

花岡　3月25日がシンポジウム・ワークショップの公募締切でしたから、まずはこれを第1回目の締切として公募枠全体の約3分の2を採択して、第2回目の締切を5月10日に設け、残りの3分の1をピックアップするという二段階で対応しました。プログラム委員長の三浦正幸さんを中心にプログラム委員の皆さんが例年より数か月の後ろ倒しスケジュールで編成してくれたんです。Late-breaking Abstractもギリギリまで受け付けられるよう工夫しました。そして、被災された学生会員の参加登録費を免除、当時の小原雄治理事長と歩調を合わせて年度会費も免除することにしました。そういう努力もしたので、年会としては無事に例年通りの規模で開催することができました。

塩見　先生のご配慮で年会参加の希望が叶った学生さんも多かったことでしょうね。私たちも多くの若手に横浜へ来てもらえるようインセンティブを検討しています。では、年会プログラムの中身ですが、「One Day 研究集会」という試みはどういったものだったのでしょう？

花岡　これは、各日に同時並行させる2テーマを異なる分野とすることで、興味のあるプログラムの開催時間が重なって聴講できないなどの不満を解消しながら、自分の関連分野のテーマ開催日だけの参加でも済むよう、多忙な参加者の利便性を図ったものでした。今日は“〇〇の日”という形で、Early Birdセミナーから始まり、Leading Edgeセミナー、一般講演、バイテクセミナー、ポスター発表、そして2コマのシンポジウム・ワークショップで締める。参加者は会期にメリハリをもたせて参加できると、これも永田さんの発案で試みのひとつとしてやってくれました。

岩崎　これまでにないプログラム編成・企画としてのチャレンジだったんですね。Early BirdとLeading Edge、このふたつのセミナーはどんな違いがあったのでしょうか？

花岡　Early Birdセミナーは完全にエスタブリッシュされた先生に、研究の秘話だったり、どんなきっかけでその分野に入ったかなど、教育的な、特別講演のような位置付けでした。一方のLeading Edgeは、当時バリバリと顕著な業績を挙げている方によるセミナーでした。

岩崎　特別な機会でもない限り、こういう偉大な先生の研究史みたいなものをじっくり聴けることは少ないので、Early Birdのような講演は特に若手は嬉しいですよね。

塩見　Leading Edgeの登壇者に東山（哲也）さんがいますね！　東山さんには2021年会の組織委員会に入ってもらっていますが、色々“裏方的お仕事”をしていただいていて、なんか申し訳ない感じです（笑）。さきほど公募締切を二段階にされたとお話を伺いましたけれども、指定企画もいくつかあったのですよね？

花岡　2011年会では、プログラム委員会のほうでこれは外せないという一部の企画を指定シンポジウム、指定ワークショップとしてお願いして、それ以外の多くを会員からの公募企画としました。あとは一般講演をできるだけやろうと。ワークショップの数を増やすよりも、ポスター発表の中から一般口頭発表への希望を募って、若手を積極的にピックアップしました。もちろんポスター発表もいいんですけどね、やはり講演というチャンスも若手には大切かなと思ったんです。

岩崎　そうですよね。うちの学生さんでも、ぜひトークで発表したい！と言う人もいるので、広くトークのチャンスがあるっていうのは良いことだと思います。

塩見　若手がたくさん参加しているとにぎやかで活気があっていいですよね。先生の年会には高校生も参加されたとか、分生年会での高校生発表（企画）が始まる前年でしたが、お問い合わせがあったのでしょうか？

花岡　とある高校の先生から、生徒たちを年会に参加させてあげたいというリクエストが事務局に入ったんです。分生ではあまりそういう対応はしていなかったんですけど、まぎれもない次世代の担い手なわけですし、それをつなごうとした先生の熱意と言うかな、そういうものを感じたのもあって「是非、分子生物学会の年会を体感してください」とお返事をしました。

岩崎　何人くらいいらしたのですか？

花岡　十数人だったかな。おひとりずつにプログラム冊子を渡したら皆さんすごく喜んでくれましたし、展示会場で結構な景品が当たった生徒さんもいたようですよ。高校生発表などの生命科学教育事業が翌年にスタートしたので、私たちの年会がお役に立てたのなら嬉しいです。

岩崎　展示会場では、ブースに寄るとチューブやプレートなど、もらえたりしますね（笑）。高校生の年会参加や発表は、今でも続いているので、この年会で始まった試みがポジティブに評価されているということなんでしょうね！

花岡　引率された先生が素晴らしい方でね。おそらくご自身も分子生物学研究のバックグラウンドがあって、ポスドクなどを経験されていたかもしれないと思っているんですけど、こういう方が熱意をもって若手を教育するから成立するところもある。生徒さんたちに夢と希望を与えたいというスタンスで参加を申し出てくださったので、私としてもお引き受けして本当によかったと思っています。

塩見　すごく未来志向のプログラムで、お祭りのようだと形容される分生年会のひとつの醍醐味と言えますね。そのときの高校生が20代の後半になって、いま何をなさっているのか…　とても興味があります。

花岡　おっしゃる通りですね。おひとりでも、サイエンスに関わるところにいてくれたらこんな幸せなことはありません。そうそう、富澤基金の第1回贈呈式もこの年会だったんですよ。

塩見　2021年会でメモリアルイベントを開催します。年会の二日目に、特別ワークショップのほか、歴代の助成対象者によるポスター発表も予定しています。私も基金運営委員をしていましたので、総勢50人の歴代の助成対象者がいまどんな研究をどこでどのようになさっているのか、とても楽しみにしているんです。市民公開講座『心とからだの生物学』、これは先生のご企画でしたか？

花岡　はい、これは私が企画しました（笑）。中村桂子先生に司会をお願いするところから考え始めましてね。脳関係の方が多いのは当時を物語っているかな。分子生物学会だからでしょうけど、快く引き受けてくださいました。中村先生は長らくJT生命誌研究館のお仕事をされて、2020年の4月に名誉館長になられています。

塩見　あ、演者が男女半々ですね！　このあたりは意識されたのですか？

花岡　ええ、もちろん意識しました。でも日本の男女共同参画は進まないようですけど…

塩見　そうなんですよ、我々が期待するほどには進んでいないんです。花岡先生の目に映る分生年会での印象はいかがですか？

花岡　分子生物学会に占める女性会員の割合に比べて、年会のオーガナイザーやスピーカーに女性が少ないですよね。それで、小原先生の2009年会で、女性オーガナイザーによる企画、女性スピーカーを積極的に登用するなどのアクションを起こされたんですけど、2011年会ではもう一歩踏み込んで、『男女共同参画の実現と若手研究者の育成』にも力を入れるという方針を打ち出しました。

岩崎　女性や若手としても、ちょっと背中を押してもらうようなことがあると、それをきっかけにやってみようと思える方もいると思うので、良い動機付けにもなりますよね。

花岡　目標設定も大事でしょうが、国の政策も然りで、旗振り役・リード役がいないと進みませんからね。草の根的なことも大事、でもそれだけでは短期で効果を上げるのはむずかしいのが実状です。

岩崎　当事者の女性研究者から声をあげられたらいいんでしょうけど、そういう気質をもった女性は特に日本人には少ないのかもしれません。そういった声が昔から大きければ今のような状況にはなっていないでしょうし。

塩見　そうね。時間はかかるかもしれないけれど、こういったことをリードする人、バトンを受け継ぐ人、がいて徐々に醸成されていくものなんでしょうね。海外の学会へ行くとすごく女性がたくさんいるじゃないですか。リードしなければって花岡先生が思われたきっかけがあったのですか？

花岡　まさにそれ、海外へ行くと思うんですよ。大規模ではない、150人とか200人くらいが参加するようなミーティングだと、その分野のトップの人が来て、そこにポスドクや学生も参加していますよね。プログラムを見てみると当たり前のように女性が活躍しているんです。これはいかに日本が遅れているかということ。サイエンスは格闘技とは違うんだから、男女で差があるわけもなく、すべて平等であるべきだし、アメリカあたりだと生物系はポスドクから学生から女性のほうが多いくらいの印象ですよね。そういうところに近づけていかないと世界から取り残されてしまう。サイエンスこそ、そういったアクションを起こさなければいけないと強く思いますね。

塩見　国ごとの特性があるにしても、日本はもっと基本の部分、根底のところを変えていくべきですよね。それではもうひとつ、育成すべしとお考えになった若手についてはいかがでしょうか？　JSTがごく最近始めたSPRING（https://www.jst.go.jp/jisedai/）は、博士後期課程に入った学生を学振レベルで経済的にサポートしていきましょうというものです。こういう制度が充実して博士が増えるといいんですけどね。あと、アカデミアのポストの問題があって、修士を出たら企業へ就職というケースが増えていますよね。将来へのリスクと感じる若者がいるのは致し方ない気もしますが、研究を通してわからないことが自分の力でわかるようになるのって、とても魅力的だと思うんです。

岩崎　小学生の人気職業ランキングだと研究者は常に上位にあるので、10代の前半くらいまでは素直に魅力的な職業だと思ってもらえているのかなって。年齢があがるにつれてリスクなども加味して考えると、その魅力は激減しちゃうってことでしょうか…

花岡　将来へのリスクは、これは昔からあったように思います。社会や経済の状況、それにポストの問題もあるのでしょうが、本当にやりたいことをやりたいって言えるといいんですけどね。ですから、高校生とか若者には広い範囲での取り組みが必要です。本当はね、以前の春季シンポジウムのような小規模なイベントも若手にとっていいものだと思います。

塩見　生物学研究の世界では、分子生物学会とかが上手に魅力を伝えていかなくてはならない。そうなると、さっきの高校生への対応とか、生命科学教育的な活動は大事になってきますね。春季シンポジウムの予算を付け替えることで始まった国際化支援は、サポートしてそれっきりという感じがあります。海外の人が呼べたりして、よい事業だとは思うんですけど、分生にとってのリターンは何かなと。

花岡　その特定の分野にはいいんですよ。でも、学会が定常的に動いていては機会が創り切れないので、合宿形式のセミナーとか特に若い人に刺激になるものがあるといいですね。

塩見　学会の国際化やオンライン化についてはいかがでしょうか？　全部を英語にしたとき、「何もわからないんじゃおもしろくない」というご意見もあります。日本語で教育を受けるということも大事ですし、どのあたりでバランスをとるかでしょうか。

岩崎　学生さんとかが初めて学会で話をするようなとき、完全英語だとそれはきびしい。RNA学会みたいに、RNAの話だけをしますって学会だと英語もなんとかついていけるのですが、分生の場合、幅広い分野が一堂に会するのが特徴であり魅力ですからね。

花岡　そうなんですよね。分生くらいの規模で、様々な分野の話が聴けるっていう学会だと、専門分野以外の話を理解するのは決して簡単ではありません。学会に参加してほかの分野の話しもかじってくるのが分生のいいところなので、完全英語となるとちょっと違うかな。英語教育は当然大事なんですけどね。だからこそ、海外へ行くことが大きな経験となるんです。

塩見　私もある程度の英語化が必要かなと思っていた時期もあるんですけど、日本語を織り交ぜつつくらいがいいかなと。数年前、胡桃坂（仁志）さんのワークショップの言語が日本語で、質問が止まずにすごく盛り上がっていたんですよ。英語オンリーのセッションではなかなかこれを体験しづらくて、新鮮さを感じました。若者がそういう風に積極的になれるなら、日本語セッションを行うのもいいのかなと思った記憶があります。

花岡　やはり、バランスということでしょうね。英語に寄りすぎて活発な議論にならないようでは本末転倒ですから。

塩見　活発な議論といえば、やはり多くの研究者に現地に来ていただく年会、ですよね。今年はコロナ禍での対応で致し方なく現地プラスオンライン形式なのですが、二つの年会を同時開催するような感じで、しかも感染対策も求められるし、企業さんにお世話になっている協賛もなかなか読めず、ということで予算的にも非常に厳しいのが現状です。

花岡　そうですよね、今年はどの学会も特にむずかしいでしょう。オンラインのよいところもあると思いますが、あまり学会らしくはないですからね。

岩崎　やっぱりオンサイトで学会があって、先生のような大御所の方にたまたま発表をきいて頂いてアドバイスなど頂ければ、とても励みになります。自分の発表以外にも、現地でいろんな人の面白い発表を聞いたり、ディスカッションしたりしてラボに戻ると、また研究を頑張るぞーってモチベーションもあがりますし。

塩見　本当に、2021年会は、なるべく多くの現地希望者に横浜でサイエンスを議論してもらいたいです。貧相でなく、明るく、堂々とした分生らしい年会にする、これが年会を託された私たち組織委員の使命だと思います。それでは最後に、2021年会に熱いエールを。

花岡　研究者自身が何か新しいことを始めようとしたときに、勉強するよりもまずは目と耳から情報を入れるというのが手っ取り早い。ですから、専門的な学会プラス分生というスタイルは日本の生命科学にとって重要な役割を果たしています。このコロナ禍で、サイエンスが日本の人たちを明るくしていけるように、分子生物学に従事する研究者たちが生き生きとした姿を国民の皆さんに見せたいですね。分子生物学会は、そういうところにも存在意義のある学会だと思います。

塩見　花岡先生、本日はありがとうございました。

花岡 文雄（はなおか ふみお）
1946年生まれ
第34回（2011年）年会長
第14期会長、第12期評議員、
第15、17、18期理事、第19期監事、
第10期会計幹事、第11期集会幹事、
第13期編集幹事

1968年　東京大学薬学部卒業
1970年　同大学大学院薬学系研究科修士課程修了
1973年　同研究科博士課程修了
1973年　東京大学薬学部　助手
1976年　米国ウィスコンシン大学マッカードル癌研究所　博士研究員
1980年　東京大学薬学部　助教授
1989年　理化学研究所　主任研究員
1995年　大阪大学細胞生体工学センター教授
2002年　大阪大学大学院生命機能研究科教授
2007年　学習院大学理学部　教授
2016年　筑波大学生存ダイナミクス研究センター（TARAセンター）センター長
2018年～ 国立遺伝学研究所　所長

年会長挨拶

ご挨拶

第34回日本分子生物学会年会
年会長　花岡　文雄
（学習院大学理学部生命科学科）

このたびの東日本大震災ならびに東京電力福島第一原発事故で被害に遭われた皆様に対し謹んでお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

さて日本分子生物学会は、第34回年会を、本年12月13日～16日の4日間にわたり横浜にて開催いたします。今回は「分子からヒトへ　ーメカニズムを知り、コントロールするー」というキャッチコピーのもと、「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」をテーマといたしました。本年会を企画するにあたって準備委員会で何度も話し合いの機会をもち、プログラム委員の皆様には、年会長の在住地域にこだわらず、広く日本全国から参加して頂くことといたしました。またこれまでの年会でも採用された特徴を活かしつつ、いくつかの新しい試みを含めて年会を進めることといたしました。その詳細は会報No. 98およびNo. 99に掲載されておりますので、ここでは繰り返しませんが、今日は「○○の日」という形で、Early Birdセミナーから始まり、Leading Edgeセミナー、一般講演、バイテクセミナー、ポスター発表、2コマのシンポジウム・ワークショップで締めるという、いわば「一日研究集会」のようなものを行います。こうすることによって、会員は年会の会期にメリハリを持たせて参加出来ますし、超多忙な会員は自分に最も近い研究集会の日だけを選択して参加することも可能です。

シンポジウム・ワークショップの一部はプログラム委員に企画していただいたものもありますが、大多数は会員の皆様のご提案からプログラム委員会で選択いたしました。3月下旬を締切りとしてシンポジウム・ワークショップを公募していたその最中に例の大震災が起きましたので、東北地方の会員の便宜を計らうため、まず公募枠全体の約3分の2を採択し、2段目の締切りを5月上旬に設け、残り3分の1をピックアップするという2段階にいたしました。その2回の採択時ともに予想を大幅に上回る応募があり、プログラム委員会ではこれらの選択・調整に大いに頭を悩ませたと聞いております。困難な作業をして頂いたプログラム委員の皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。また、優れたご提案にも関わらず会場の関係で残念ながら採択できなかった応募も複数ありました。積極的な応募をいただきましたことに重ねて感謝申し上げます。

本年会のもう一つの特徴は、一般演題を特に重視することです。最近の年会では、ワークショップの一部に一般演題からピックアップされた講演を採択する場合は見られましたが、今回はそれをさらに進めて、一般演題の中で本人が口頭発表を希望するものの中からプログラム委員会が「一般講演」として採択することにしております。特に口頭発表の機会の少ない若手研究者や院生を中心に、ポスター発表とともに一般講演でも自らの研究をアピールする場を提供します。

これまでも本学会は若手や女性研究者に対して、特に配慮をしてきておりますが、本年会でも上記「一般講演」の機会を設ける、シンポジウム・ワークショップのオーガナイザーや講演者に若手・女性研究者を積極的に登用する、などの具体的な措置を取っているほか、例年のように保育室や親子休憩室を会場内に設けて、少子化対策、男女共同参画の実現などに配慮いたしております。

また従来からの流れにしたがって、外国にも開かれた学会でありたいとの思いから、シンポジウムでは講演、質疑応答すべてを英語で、またワークショップにおいても講演は英語、質疑応答は座長の裁量にお任せするという形で行います。またポスター発表においても、少なくとも要旨は英語での執筆を推奨いたします。

さらに、これもここ数年の流れを踏襲し、要旨集はオンライン化し、印刷物は発行いたしません。ただしプログラム集は印刷物を作成・送付し、参加登録者はパスワードとIDを用いて年会ホームページから事前に要旨等の閲覧・検索・ダウンロードができるようにいたします。また会場においては、PCやスマートフォンにて検索・閲覧・その他のサービスを利用出来るようにする予定です。

また今年度に特別の配慮として、東日本大震災で被災された学生会員の2011年度学会会費と年会登録費を免除いたします。手続き等については学会本部のホームページおよび年会ホームページでお知らせします。

この国難の年に、わが国の分子生物学に関わる研究者が一堂に会し、さらに海外からの研究者にも参加していただき幅広い分野について、実りある議論をかわすことによって、分子生物学のさらなる発展の一助になればと願っております。12月に横浜で皆様とお会いできることを楽しみにいたしております。

第37回（2014年）年会

小安 重夫 年会長インタビュー

日 時：2020年3月24日（火）16：30～18：30
場 所：理化学研究所 東京連絡事務所 COREDO 日本橋オフィス棟15階

塩見　小安先生の年会でプログラム委員長を務めさせていただいたのですが、最初の会議で先生はこう仰いました。「コンカレントにすると人が分散してしまうから、セッション数を減らしてでも会場に人を集めたい」とても明快だったのでよく覚えています。このメッセージの理由からお伺いしてよろしいでしょうか？

小安　若手を中心に考えるのが分子生物学会ですから、ポスター発表も口頭発表も活気が感じられる雰囲気を大切にしたかったんです。そのためにはとにかくサイエンスを中心にする、これが私の唯一のコンセプトでした。それになんだかんだと皆さんお忙しいし、会期四日は長いという議論もされていました。全体のプログラムを三日にできる自信もありましたし、いずれ誰かの決断に委ねることになるんだったら私が決めようと、そう考えてのことでした。

岩崎　のちの年会アンケートをみますと、会期を三日間にされたことに加えて、小型化・軽量化されたA5サイズのプログラムも、世代を問わず参加者に高評価だったようですね。年会の会場でパソコンを持ち歩く方は少なくありませんし、コンパクトになったプログラムは以降のスタンダードになりました。その一方で、口頭発表に応募のあった79件を49セッションに編成するのはかなり大変な作業だったのではないでしょうか？

小安　三日でやるのは初めて、さらにセッション数を大幅に減らしたわけですから、塩見さんはじめプログラム委員の先生方にはご負担をかけました。プログラムに落とし込んでいく作業は私もドキドキしましたが（笑）、皆さんがうまく編成してくれました。スロットがあるから埋めていくという機械的な作業ではなく、表現がむずかしいけれども、おもしろい発表には人が集まるんですよ。シンポジウムに大物を呼べば何となく箔が付くような感じもわかるけど、それだったら実際にデータを出している中堅や若手にやってもらったほうがよっぽどいい。それに、分生年会の主軸はあくまでもポスター発表であって、特に若手のポスターに人が集まることが何より重要だと思っています。2009年会で小原（雄治）さんが命名したディスカッサー制度がありますよね。私自身もディスカッサーをやってみて、体験してその良さがよくわかりました。若い人がすごく喜んでくれる。緊張もするだろうけど、なかなか接点のないような人が自分の話を聞いてくれる、自分のポスターをみてディスカッションしてくれる。今回も真剣な眼差しで議論が交わされる幾多のシーンにふれたとき、「年会長をお引き受けしてよかった」という気持ちが心の底から湧き上がるのを感じました。

塩見　嶋田一夫先生（組織委員長）や石野史敏先生（組織委員）と年会本部でそういったお話をされていましたよね。参加者数の推移データとにらめっこしながら（笑）。

小安　そうそう、それでポスター討論が始まる頃に彼らと展示ホールへ移動して、急遽参加できなくなったディスカッサーがいると知れば、顔見知りの足を止めて「何番から何番までのポスターディスカッサーをたのむ！」みたいなこともやりましたね。

岩崎　2021年会でもこの制度の良い部分を生かしてさらにバージョンアップできるような仕掛けを検討したいと思います。

小安　「わざわざポスターをまわる意味があるのか？」というような指摘は今も少なからずあるでしょうね。ただ、せっかく研究の成果をまとめた発表者に対して年会は敬意を払うべきで、私はそれが若手育成にもつながると思っています。例えば、これから論文にしようとしている若手には実験のバリエーションを提案してあげるとか、ポジティブなフィードバックが大事で、こういうことがサイエンス全体を底上げして、サイエンス自体を活性化していくんじゃないですかね。

塩見　昔は辛辣で厳しい質問を受けた学生がフリーズするみたいなことがあったと聞いています。私もアメリカから帰ってきてすぐくらいの分生年会だったかな、そういった場面に遭遇したこともありました。最近は、質疑応答は大変お行儀よくなされますよね。シンポジウムやワークショップの座長を仰せつかって、フロアからの質問がなくて、私がポディウムから質問を続投するといった経験もあります。

小安　何十年も前は、勢いのある若手がいたら、「ぺんぺん草が生えなくなるまで叩いてからがスタートだ！」みたいなこともあったと聞きます（笑）。私自身も、突っ込みどころのある発表にはすべて質問するようなタイプですが、闇雲に厳しい質問を浴びせるのではなく、ただただ真剣に議論するということでしょう。少なくともサイエンスの議論はそうでなければいけない。ディスカッサーがポスター会場をまわって議論することで、議論がない発表が無いという、こういうスタイルが分子生物学会の年会に合っていると感じます。

塩見　そうですよね、私もそう思います。では、いまの若手、分子生物学にかぎらず、ライフサイエンスの日本の若手研究者を先生はどうみてらっしゃいますか？

小安　「博士後期課程の若手を増やさないと日本のサイエンスが終わってしまう」ということをあちこちで発言しています。給料を出すべきだと主張していますし、言い続けないといけません。分生はキャリアパス委員会が発信を続けているけど、これはすごく有効な取り組みだと思いますよ。研究の現場では、それぞれの施設が共同研究や連携大学院などの仕組みを駆使しているわけですが、本筋としては、サイエンスがおもしろいってことを学生さんに根付かせる活動が重要でしょうね。若い人って、研究でおもしろい結果が出てそれを楽しいと思うと、結構馬力が入るじゃないですか。そういう人を増やしてあげたいですよね。かと言って、ボスがむやみにおだてるのは甘やかすだけになってしまうかもしれない。だからこそ、研究室から離れた学会発表の場で、ディスカッサーと議論するような機会があるべきと思います。

塩見　ポスターは女性がたくさん発表していていいですよね。分生会員の女性比率（3割弱）よりも高い比率ですし、これはとても喜ばしいことです。ただ、シンポジウムやワークショップでの比率の低さにはあまり変化がみられていません。

小安　日本でも持続的に取り組んでいるけど、なかなか増えていないですね。「スピーカーの3分の1は女性に」という国際的なアベレージになるべく近づけようとしているものの、そもそも欧米はそんなルールがなくても女性が多いからね。日本にだって性別を限定した公募や賞には絶対応募しないって人もいるし、何が正しいのか、どうあるべきか、難しさをいつも感じています。

塩見　海外では参加者が女性ばかりのセッションもあったりしますよね。分子生物学会でも、年会保育室を導入された山本正幸先生の2001年会で、スピーカーが全員女性のワークショップが企画されました。その後、男女共同参画ワーキンググループが委員会組織に昇格して、今はキャリアパス委員会のもと、女性研究者を盛り上げようと年会での企画が毎年のように行われてきています。2021年会で久しぶりに女性だけを集めてみようと思う反面、これはつまり20年間、我々は、同じ目標に向かって同じような企画を行っているんだ、という実情を思い知らされ、焦りというか、一抹の不安をおぼえたのも事実です。なんとかしたいとずっと考えていますが、同時にフッと思い浮かんだのは、果たして日本の女性若手研究者で、PIとしてバリバリやっていきたい人がどれくらいいるのか、ということなんですね。我々は、彼女たちの希望を汲み取り、彼女たちにとって良かれと思ってやっている企画なども、本当はちょっと的ハズレで、だから費用対効果が思うほど出てきていないのではないか。そろそろ、当事者の生の声を改めて拾い集め、問題意識を新たにし、それに沿った改革を推進する時なのかな、その主体となるのも歳をとった我々ではなく、女性若手研究者たち自身に任せてみる、少なくとも案を出してもらうのは良いのかな、と思ったりもします。

岩崎　研究を続けていきたいというところから、PIというものを意識したとき、すごく高いハードルだと捉えている女性が少なくないと思います。PIを目指すなら結婚も出産もあきらめ、多くを犠牲にしないと無理だと思っている人が多い…　研究も完璧にやりたいし、子育てだって完璧にと考えたら、それはどちらかしか選択できなくなりますよね。私は小学生の頃にアメリカにいましたが、日本人メンタルなのでいろいろと不安になることもあります（笑）。でも、美喜子さんみたいな女性PIもいますし、幸せに研究できるんだということをしっかり示す必要がありそうです。

小安　生活に何を求めるのか、その基準が変わってきている可能性もありそうだけど、やっぱり頑張っている人をロールモデルとして宣伝しなきゃいけないでしょうね。

塩見　アメリカで過ごしているうちに、あまり気を張らず、それほどちゃんとしなくてもいいんだと、周囲の女性研究者たちをみてそう思えるようになったんです。それを日本でどう設定するかが問題ですけど、自分が見聞きしてきたやり方がスタンダードだとは決め付けず、いろんなやり方、多様性を知るためにも海外への留学はよいと思います。

小安　そう、多様性を知って、そこから学ぶことが大事ですね。アメリカにかぎったことではないでしょうが、海外での手続きのいい加減さにとまどった日本人は少なくないんじゃないかな。ただそれでも不思議と慣れちゃうんだよね（笑）。最初は抵抗があっても、慣れるとむしろ楽に感じたりしてね。さらに日本に帰ってくると、細かいことは指摘しないで欲しいと思うようにもなる。

塩見　そういう意味でも、学会は多様性の坩堝と言えそうですが、広い研究領域をカバーする分子生物学についてはどう思われますか？

小安　学会の創立40周年記念対談で大石道夫さん（第10期会長）に逆に問いかけられてしまったんだけど、「21世紀の分子生物学は何がある？」、「分子生物学会の存在意義はなんだ！」というわけです。世界的にみても、「分子生物学」の学会って日本にしかありませんが、そのコンセプトになったのは「分子遺伝学」でしたよね。遺伝子と個体とのあいだのブラックボックスをいかに解くかというところがあって、還元主義の権化みたいな学問だったからね、分子生物学というのは。だけどそれが今日的な意味になったとき、「分子生物学」とは果たして何だろうと。分子生物学的な手法を使って拡大してきた学会であることはたしかですが、かなり深い問いであるように思いますね。

岩崎　年会プログラムで演題分類の変遷をみると、本当に広い領域をカバーする学会であることがわかりますが、これらの領域も、マージしたり、分岐したり、新設されたり、実は今でもずっと変わり続けてきているんです。

塩見　分生はそういう変化を遂げながら、最近ではEMBOとの関係強化によって、フェローシップ制度を若手に活用してもらうためのサポートをしたり、ラボマネージメントスキルを理論的に学べるコースを共同開催したり、若手支援を前提とした学会の国際化に力点を置いています。また、韓国分子細胞生物学会（KSMCB）などからもアプローチを受けています。このような海外との連携についてはいかがでしょうか？

小安　目的次第だと思います。情報を交換したいのか、それとも人の行き来を活発にしたいのか、何のために学会を国際化するのかということであって、お互いにどういうメリットがあるのか継続的な議論が必要でしょうね。一方で、年会の英語化は分生でもやるべきだと私はずっと言っています。抵抗感をもつ人もいるだろうけど、若手の英語力はかなり上がっているし、発表するだけなら練習すればできるようになります。ディスカッションは大変だから、どうしても詰まったときには「日本語でもいいよ」って座長が助け舟を出してあげましょうよ。だから、国際化を目指すなら年会の使用言語はすべて英語でいいと思う。外国から人を呼んだって、英語の年会なら彼らはそこを尊重して貢献しようとしてくれますから。でもただの連携だと、ものすごく手間がかかるわりにあんまり効果を見出せないんじゃないかな。やるなら自分たちが襟を正して足元から変えていかないと。そういうところで鍛えてあげれば、学生さんも国際学会で臆することがなくなっていきますよ。

塩見　海外からいらした人をいろんなセッションに招いて、ポスターのディスカッションにも参加してもらったりすると、学生さんの刺激にもなりそうですね。年会だけにとどまらず、学会は今後どのようになっていけばよいと思われますか？

小安　これからの日本のサイエンスがとっても不安なので、とにかく若い人をどうやって育てられるかにかかっているでしょう。ただ幸いにして、日本の分子生物学会は我が国のライフサイエンスのすべてを包含しているような状態にあるので、いかに盛り上がっていけるかってことをこの学会には考える責任があると感じています。それと、未発表データの発表が多い学会はいい学会だと皆さんそう思われているはずです。撮影や録音は無論一切させず、高いモラルの中で発表できる環境が整っていれば、それは年会の価値をさらに高めると思いますよ。私の恩師である岡田吉美先生が第1回年会の年会長をされたときは、A会場とB会場の二つしか会場がなくてね。でも活気があった。若手のひとりとして当時の私が感じていたのは、その活気は若い人が主体的になれる自由な雰囲気があったからこそだということです。

塩見　仰る通りですね。それでは最後に、2021年会に向けて私たちにエールを。

小安　分子生物学会のキャリアパス委員会が、男女共同参画を含む日本のサイエンスを取り巻く問題に真っ向から挑み、すごく真面目に議論しているじゃないですか。これは素晴らしいことです。それこそ、日本の女性研究者のロールモデルが示せるような、対外的なアプローチも今後さらに求められていくでしょう。年会も学会も若手を大事に。私も引き続きお手伝いさせていただきます。

岩崎　理事会の女性比率も会員比率くらいになってくれるといいですよね。無理なカタチではなくごく自然に。

塩見　小安先生、お忙しいところ本日はありがとうございました。

小安 重夫（こやす しげお）
1955年生まれ
第37回（2014年）年会長
第20期副理事長
第16、17、19、22期理事、第21期監事

1978年　東京大学理学部生物化学科卒業
1981年　東京都臨床医学総合研究所 研究員
1988年　ハーバード医科大学 ダナファーバーがん研究所 ポストドクトラルフェロー
1990年　同　助教授
1995年　慶應義塾大学医学部　教授
2013年　理化学研究所統合生命医科学研究センター　センター長代行
2014年　同　センター長
2015年　理化学研究所　理事

MBSJ

年会長挨拶

2014年分子生物学会年会参加者のみなさまへ

第37回日本分子生物学会年会
年会長　小安　重夫
（理化学研究所統合生命医科学研究センター）

ようこそ横浜へ。いよいよ第37回日本分子生物学会年会が始まります。今回は従来の４日間から3日間にわたり、3,000を越える演題が発表されます。

これまで繰り返し申し上げてきましたように、第37回年会は、サイエンスの議論を中心に、皆がデータを前にとことん議論のできる学会を目指してきました。そのために、今年の年会はポスター討論を中心におきましたが、ワークショップも一般演題から多くを採用して構成していただきました。さらに、指定演者にもポスターを出すことをお願いしました。

ワークショップでの議論の後には皆でポスター会場へ移動して、参加者と演者とが議論を戦わしてもらいます。ポスター会場では、最初の30分は自由にポスターを見て頂きますが、次の１時間は奇数番号の方にはポスターの前に陣取って頂き、そこをディスカッサーが順番に周り議論の火付け役兼仕切り役をしてもらいます。次の１時間は偶数番号のポスターで同様な議論をして頂きます。最後の30分は再び自由にポスターを見て頂きます。自分の番が終わったからと言ってポスターをはがすようなことはせず、最後まで議論に参加して下さい。サイエンスを語る時、年季の入った研究者も初めて参加する学生も、同じようにワクワクすることと思います。皆が同じようにディスカッサーや他の参加者を相手に議論を戦わすことをぜひとも楽しんで下さい。

これもまたお約束したように、この時間には他の行事は一切入れておりません。大いに議論して下さい。ディスカッサーは、議論の仕切り役として、ぜひとも大いに年会を活気づけて下さい。よろしくお願いいたします。

世界で初めて観察しているかもしれない現象が自分の目の前に現れる時、研究者の心はときめきます。目の前のデータが自然の謎の何を我々に語ってくれているのか、それをじっくり解き明かしていくのがサイエンスの醍醐味ではないでしょうか。役に立つとか立たないとか、そんなことは関係ありません。真実が目の前に現れる、その瞬間に立ち合いたい、それが科学者の研究意欲をかき立てる大きな動機です。そして、そんな興奮を繰り返し味わいたくて研究を続けている人は多いと思います。

若い参加者の中にも既にそのような思いをして、サイエンスにはまった人もいるでしょうし、他人の発表からそのようなときめきを感じる人もいると思います。私もこの年会で色々なサイエンスに出会えることを期待しています。

皆さん、大いに議論をしましょう。

第37回
日本分子生物学会年会

The 37th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan

会　期　**2014年11月25日(火) ～ 27日(木)**

年会長　**小安 重夫**（理化学研究所統合生命医科学研究センター）

会　場　**パシフィコ横浜**

演題投稿受付期間　**2014年7月1日(火) － 7月31日(木)**

事前参加登録期間　**2014年7月1日(火) － 9月30日(火)**

連絡先　第37回日本分子生物学会年会事務局（株式会社エー・イー企画 内）
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4F
Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：mbsj2014@aeplan.co.jp

大会HP　http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014

MBSJ

第39回（2016年）年会

一條 秀憲 年会長インタビュー

日 時：2021年6月24日（木）14：00〜15：45
場 所：東京大学 本郷キャンパス 薬学系総合研究棟

塩見　2016年会の『半端なベクトルに出口なし！』というキャッチフレーズは印象的な問いかけだったように思います。このあたりのコンセプトからお聞かせいただけますでしょうか？

一條　ちょうどこの頃、いわゆる出口指向の研究が強く求められ始めた時期でした。研究者の側もそれにつられ、なんでもかんでも創薬につなげますみたいなことになった。でも、薬が簡単に創れるはずのないことを知っている基礎研究者が、そんなことやっていてはダメですよね。自分の求める方向性と出口が近ければ良いのだけれど、遠いのに無理に合わせようとすると研究の力も半減しちゃうんだし、そのベクトルが半端だと自分たちの首を絞めることになる、そういう警鐘の意味を込めたかったんです。ファンディングエージェンシーとしても本当はいろんな出口を用意できるといいんだけど、予算にはかぎりがあるからどうしても重点分野に絞りがちです。もちろん、そういった出口指向の研究が無ければ困るし、応用をめざす研究が悪いわけでも決してありません。要は研究者自身のやりたいこととピッタシあっていればいいんです。組織委員長の三浦（正幸）さんと、キャッチフレーズだけが一人歩きしないようにしなければねと言ってたんだけど、2016年会としては、まずは基礎研究を徹底的にやりましょうと、そこから応用につながっていけばいいなという、ボトムアップ的なメッセージを出したかったんです。

塩見　私も含め、皆さんそのメッセージを受け止めていらしたと思います。ここにも飾ってあるけど、年会ポスターは落ち着いたいい画ですね。『Sleeping Gypsy』に何か秘められたことがあったのでは？

一條　近藤（滋）さんの年会以降、画家の作品をモチーフにする慣例があったじゃないですか。それで、最初は好きなシャガールにしようと思ったんですけど、没後50年を経過していないからパブリックドメインに適用されないことがわかって、たまたま近い時期にMoMAでアンリ・ルソーを観ていたから決めたみたいな感じでした。デザインの第1版と第2版では若干色味がちがうんですが、もう1箇所、明らかな違いがあるんですよ。

岩崎　DNAの巻方、ですか？

一條　そうです。これはちょっとした裏話なのですが、第1版をご覧になった会員から、「本来右巻きであるべきDNAのらせんが左巻きとなっておりおかしい」とご指摘をいただいてね。でもこれ、ジプシーがみている夢の中の物語だし、鏡像というか、反転しているおもしろさがあっていいんじゃないかなと個人的には思ったんだけど、教育上どうかということで修正してもらったのが第2版となったわけです。

塩見　ということは、第1版のポスターは世の中に何枚かしか出回っていないのですね。横浜で間違い探しできるかも。由香さんよく気づいたね。

岩崎　間違いやすいポイントはそこかなと。

一條　すごいですね。この第1版はいつかレアものとして価値が上がるんじゃないかと、僕は

数枚確保してます。まぁ、特別に秘めたことはなかったけど、意図せず秘められたことがあったんです（笑）。

塩見　2016年会の口頭発表はすべてシンポジウムでしたね？

一條　はい、ワークショップが格下にみられるヒエラルキーがなんとなくイヤで、若手もシンポジウムの座長・演者になってもらおうと、公募企画もフラットにシンポジウムとしました。プログラムはすべてプログラム委員長の村田（茂穂）さんにお任せして、丸々数日かけて見事に編成してくれました。東大薬学のなかだけで年会組織を構成した甲斐あって、意見交換もしやすかったと思います。数年かけて年会の準備を進めていると言っても、やはり密に議論したい場面もあるし、会議日程を調整して、あちこちから集まってもらうのも結構大変ですからね。ちょっと閉じた感じにみえるかもしれないけど、チームワークとフットワークを考えてこうしました。

塩見　同感です。私たちの年会もそのあたりを意識して準備にあたっています。朝一番の企画、早朝のセミナーはめずらしかったですよね？

一條　そうですね、プレナリー的なものはあまり分生らしくないので、どちらかというと、若手を呼び込むための教育講演的な意味合いで企画しました。

塩見　参加者のフットワークを意識されて、コーヒーやマフィンを提供されたのですか？

一條　いえ、著名な方々にモーニングセミナーを引き受けていただけたので、朝はあえて出さず、その分ポスター会場のビールに厚みを出しました。Keystone Symposiaなんかでもありますよね、オーガナイザーがお金を集めてきて、参加者は5ドルくらい払って飲めるみたいな。ポスター会場でアルコールを振る舞いたいと思ったものの、年会長の立場ではやはり収支が気になるじゃないですか。事前参加である程度の見込みは立てられても、会期中に雨が降れば少なからず足が遠のくこともありますから。ですから、収支予測をみながら、とりあえず初日に提供できそうな数を出して、横浜球場で活躍している売り子さんにビールのサーブをお願いしました。結果的には三日間の会期を通じて提供することができましたが、無料サーブ分が終わった途端に皆さんほとんど買ってくれないと売り子さんが嘆いてました（笑）。

岩崎　今年もやりたいですけど、ハイブリッドではむずかしそうです。アルコールの提供はアンケートでも様々な反応だったようですね。

一條　まずまずだったと聞いていますが、ビールなんてけしからんとか、アルコールくさい人は困るとか、なかにはそういった意見もいただきましたよ（笑）。ほかにご意見が寄せられたのはポスターへの顔写真貼付でした。

岩崎　ポスター発表時のアルコールの提供は海外ではよくあることだと思いますが、反対意見もあるんですね。顔写真はどういう意図ですか？

一條　ポスター会場で演者がみつからないことってよくありますよね。でもせめて顔写真があれば双方にメリットがあるかなって。それで、写真の貼付をマストにしてはどうかと思ったんですけど、組織委員会でもマストにはしない方が良いという意見もあって、抑え気味のトーンにしたら貼付してくれる方は期待してたほど多くなかったんです。「推奨」という表現が弱かったんでしょうが、書き方ひとつですごく変わるんだということをこの経験で得た感じです。

岩崎　日本ではめずらしいのかもしれませんが、海外の学会のいいところをたくさん取り入れて素晴らしいと思います。

一條　ありがとうございます。そのあたりは意識した点でした。

塩見　最終日の夜に市民公開講座『ゲノム編集は生命観を変えるか？』が開催されました。

一條　これはもう大隅典子さん（第18期理事長）にお任せしちゃいました。大学の同級生なんですけど、こういうテーマは彼女がやってくれたら、いろんな意味で安心できるし、学会本体の公益事業的にもいいかなということで。高校生発表に参加した学生さんも来てくれて、時世にも合ったテーマだったんじゃないかなと思います。本当は市民公開講座も土日にできたらよかったけど、平日は夜でないと一般の方にはなかなか来ていただけないし、このあたりはむずかしい判断でした。フォーラムもね、問題意識の高い方が中心になってテーマを絞って企画されるものだから、夜の開催は申し訳ない気持ちもありましたが、参加者は少なくなかったようです。横浜にかぎったことではないんですが、みんな飲みに行きたいでしょ（笑）。だから18時以降にはサイエンティフィックプログラムを組まないようにしました。

塩見　コミュニケーションを交わす絶好の場ですからね。では、ポスター発表での座長制についてはいかがでしたか？

一條　小安（重夫）先生の2014年会に参加して、会期三日の横浜年会として完成した感じを受けたんです。ポスター・展示会場のキャパを活かして、企業展示からポスターへの導線もよく、一体感のあるあの年会のスタイルが僕も好きで、2016年会のベースにさせていただきました。その流れのなかでのポスターの座長制でした。だいぶ前ですが、福岡の球場がポスター会場になったことがあって、僕も座長を務めました。そのとき、たまたま担当したなかにいたのが学生時代の倉永（英里奈）さんだったんです。よくできる人がいるんだなという印象と、そのときの楽しかったイメージがすごく残っていて、僕にとってのいい出会い、その思い出があったので、ディスカッサーではなく、ポスター座長という懐かしい名称でやらせてもらいました。

岩崎　会員の方から「ディスカッサー」が和製英語だというご指摘がありました。たしかにそうとも思うんですが、あえての「ディスカッサー」という用語も分生年会では定着している向きもあるようです。確かに、「ポスター座長」は良いですね。また一方で、分生はディス

カッサーがいなくてもポスターが十分に盛り上がっているというご意見もいただきました。

塩見　アクティブに話しているところは邪魔しないで、ディスカッサーの皆さんには、議論する相手がまだいないようなポスターをまわってもらおうと思っています。

一條　僕のときもそうだったかな。名称こそ変えたけど、盛り上がっているところはそのままで、座長には火付けに徹してもらいました。うちの学生さんにも言うんだけど、偉い先生が来たときアピールするチャンスを逸することのないように、ポスター説明は1分、2分、5分のように、いくつかバージョンを用意しておくのが大事ですよね。ともあれ、倉永さんを見出したポスターの座長制はよかったということかな（笑）。

岩崎　ポスター賞も好評だったようですね。うちのラボの学生さんは、賞状をずっと机に貼っていましたし、すごく喜んでいました。

一條　分生の年会でポスター賞とりましたってなると、その若手にとってはやっぱりいいことだし、業績が自身のプロモーションにも使えるし、積極的に乱発（？）しましたね。これ、座長にとってのインセンティブでもあるので、座長に選出してもらいました。

塩見　若手もすごく喜んでくれたし、「一條先生、もう一度年会やってみますか？」と言われたらどうされますか？

一條　もういいもういい（笑）。この手の役は一度だから頑張れるんですよ。僕の場合は、仲間内でやれたのもあって、本当にすごく楽しかったですよ。

塩見　では、日本の若手研究者についてどう思われますか？

一條　ひとつあげるとすれば、海外に行かなくなっちゃっているのは困りますね。日本に戻ってきてからの不安定さがそうさせているのが大きな問題だと思います。今はコロナで途切れてますが、うちのラボでは、オックスフォードに6週間くらい短期留学するプログラムなどを使って、無理にでも海外生活を体験してもらうようにしていますが。

岩崎　無理にでも送り出す親心、素晴らしいですね。

一條　それでも、海外学振がとれても500万円くらいですから、向こうの最低賃金には届かないんですよね。だから、これを持って行っても、向こうでプラスアルファをもらわないと最低賃金にならない。民間財団のサポートも一件あたりの助成金を大きくしてもらえると助かる若手は増えると思います。

塩見　重複申請が認められないケースもありますしね。最近はそのあたりの事情が理解されてきたのか、だいぶよくなってきているとは思います。何よりも若手ですよね。分生はそこを第一に考えている学会ですから、キャリアパス委員会には引き続きそのあたりを頑張ってもらいたいです。では、女性研究者についてはいかがですか？

一條　東大薬学は、実績的にまだまだ胸を張って言える状況ではありません。それこそ財団の審査などでも、女性比率を上げるために単純な合格ラインの点数よりもアファーマティブアクションは意識すべきでしょうね。どんなコミュニティーにおいても、女性比率は最低20%を死守しなければいけないと思います。

岩崎　日本の女性は海外の女性に比べて、不満があるような場合でも、なんとか戦ってやるというより、我慢の末に諦めてしまうケースが多いかもしれないですね。

一條　そういうケースもあるかもしれませんね。それでも、政治家の無責任で不適切な発言が叩かれるようになってきているし、世の中の変化は皆さん感じていると思います。しかし、なかなか数値には表れていないようですね。

塩見　分子生物学会のこれからは？

一條　僕が年会長に指名されたとき、東北大学の山本雅之先生が同じ2016年に生化学会の大会長をされることになりました。山本先生や僕らの領域は分生と生化でかなりかぶっているのもあって、年に二回、生物系で大きな年会があるのは結構な負担なんです。それで、山本先生にすぐ電話したのですが、2011年東日本大震災の復興を旗印に東北で開催されるということが決まっていて、また当時の仙台ではサイズ的に合同大会の収容キャパがないということがあって、合同大会を断念した経緯がありました。生化とかぶらない領域があるのもよく理解しているんだけど、何年かに一度合同にするとか、そういう可能性は模索してもよいと思います。このコロナの状況で世界的にも様々な動きがあると思うので、そのあたりの動向を見据えつつ分子生物学会のあり方みたいなことを考えていく時期なのかもしれませんね。学会という枠を越えれば、生物科学学会連合のような塊で意見を発出するようなことも益々重要になりますよね。

塩見　生科連代表の小林武彦さんが学術会議の基礎生物学委員長を担っていますし、よい感じで世代交代を進めてくれるでしょう。

一條　生物系ではやはり分生がオピニオンリーダー的な役割を果たすべきと思います。ただ、議題がてんこ盛りのわりに理事会が年に一回しかないからか、生化学会に比べるとちょっとカタい感じがします。こういった雰囲気を打破するためにも、分子生物学会も次世代が担っていくべきですね。

塩見　年会の国際化あるいはオンライン化についてはいかがでしょうか？

一條　アフターコロナがどうなるか、研究者を取り巻く環境もまだ現時点ではみえていない部分が少なくありません。なんといっても、学会発表はインパーソンでやりたいですよね。オンラインだとオーディエンスがみえないし、レスポンスの感じがね。初めて発表するような内容のとき、うけるかどうかわからない状況を

経過しながらも、ドーっと湧くような瞬間ってすごく嬉しいじゃないですか。やっぱり場の雰囲気ってあるけどオンラインだと掴めない、それが一番気になっています。

岩崎　オンライン発表で英語ってすごく厳しいですよね。いきなり国際電話で会話するようなものですからね（笑）。

一條　若い世代が英語に慣れてきているとは言っても、やっぱり普段からのトレーニングが必要ですからね。そうなると、英語での発表だからちょっと引いちゃうみたいなケースもあると思います。分生の年会は特にポスターが大事なので、使用言語についてはじっくり議論しました。無理に英語を導入すると静かになっちゃたりしますから、ゆるやかな国際化くらいがいいんじゃないかな。また、口頭発表にしても、発表は何度も練習できるけどディスカッションはね。だから、単純に年会を国際化・英語化するだけだと、分生の若手会員にとってはむずかしいだけかもしれません。

塩見　特にオンラインだと、言葉の壁は高くなりますよね。その壁を少しでも低くして、また分生で発表したいと思ってもらえる年会にしたいと思っています。それでは最後に、2021年会にエールを。

一條　塩見さんがやるから僕は何も心配していません。今年はハイブリッド開催で年会を乗り切らないといけないし、本当にご苦労が多いと思います。当然、収支がシビアなのは理事会もわかっているし、この難局を学会本体がちゃんとサポートすることで未来の分生を盛り上げることになるんですから。ビールが配れないのは残念ですけど、もしやれたら僕が一番に並びますので（笑）。

岩崎　せっかく横浜の会場を借りているので、たくさんの方に来ていただいて、とことん年会を楽しんでもらいたいです。

塩見　2014年会でプログラム委員長をさせていただいて、ディスカッションすることを大事にしながらコンパクトな年会ができることがわかったので、私たちの2021年会もそんな風にやれたらいいなと思っています。

一條 秀憲（いちじょう ひでのり）
1958年生まれ
第39回（2016年）年会長
第18、19、21、22期理事

1985年　東京医科歯科大学歯学部卒業
1990年　東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
1990年　Ludwig癌研究所 Uppsala Branch留学
1992年　東京医科歯科大学歯学部　助手
1995年　癌研究会癌研究所　研究員
1998年　東京医科歯科大学歯学部　教授
2002年　東京大学大学院薬学系研究科教授
2011年　東京大学　総長補佐
2012年　東京大学創薬オープンイノベーションセンター　センター長
2013年　東京大学大学院薬学系研究科ワンストップ創薬共用センター　センター長
2015年　東京大学　教育研究評議員
2015年　東京大学創薬機構　機構長
2018年　東京大学大学院薬学系研究科研究科長
2019年　東京大学ライフサイエンス連携研究教育拠点　拠点長

MBSJ

年会長挨拶

第39回日本分子生物学会年会の開催にあたって

第39回日本分子生物学会年会
年会長　一條　秀憲
（東京大学大学院薬学系研究科）

2016（H28）年度の日本分子生物学会年会は、「半端なベクトルに出口無し！～徹底した基礎研究から広がる応用～」というテーマの下、11月30日（水）～12月2日（金）の3日間、パシフィコ横浜において、国内外の演者による114枠のシンポジウム、約3000題のポスター発表、各18枠のランチョンセミナーとフォーラム等による国際色豊かで活発な情報交換の場を提供するとともに、最終日には「ゲノム編集は生命観を変えるか？」という分子生物学会らしい市民講座が開催されます。

これまで「年会のコンセプト」の中でも繰り返し申し上げてきましたが、本年会のもっとも重要なミッションは、「基礎研究に徹する」ことの楽しさ、大切さ、素晴らしさを（再）認識する機会を提供することです。

その特徴をいくつか挙げますと、これまで分生単独開催の時にはなかった特別講演枠（プレナリーモーニングセミナー）を設定し、まさに基礎研究に徹して偉業を成し遂げて来られた先生方に、自由なテーマで講演をお願いしました。また、厳選された分生らしいシンポジウムだけをシンプルに配置するとともに、これまで指定シンポジウムに限られていた海外招聘演者への旅費支援をシンポジウム枠すべてに拡大することで、国際化の推進を試みました。一方、使用言語に関しては、緩やかな国際化と深みのあるディスカッションの両立を目指し、英語セッションにおいても質疑応答は臨機応変に「日本語も可」を推奨しています。

また、分生最大の特徴ともいえる熱気溢れるポスターセッションでは、4分発表3分質疑応答の持ち時間を座長に仕切っていただくことで、前後のフリータイムでの白熱した議論を誘導する狙いです。さらに、誰がポスター発表者なのか名札を探し廻らなくても済むように、ポスターに顔写真の添付をお願いしました。そして・そして、ポスター会場でのミキサー（！）。今どきではないかもしれませんし、好き嫌いもあると思いますが、海外では当たり前（？）のアルコールの力もちょっとだけ借りて、サイエンス議論を盛り上げることに挑戦します。

最後になりましたが、寄付・展示・広告等にご出捐いただいた企業・団体の皆様に感謝するとともに、年会準備に携わって下さったすべての皆様に心から御礼申し上げます。特に、プログラム委員（村田茂穂委員長）ならびに組織委員（三浦正幸委員長）の皆様には、約2年前から幾度となく会議やメールによるディスカッションに参加していただき、企画構成に関わるさまざまな作業にご尽力いただきました。また、たいへんお忙しい中、ポスター座長をご快諾いただいた300名近くの先生方のご協力無しには年会の開催に至ることはあり得ませんでした。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

それでは、もうすぐ皆様と *Yokohama* でお目にかかれること、楽しみにしています。

第41回（2018年）年会

石野 史敏 年会長インタビュー

日 時：2020年9月30日（水）15：45～17：30
場 所：東京医科歯科大学 M&Dタワー23階

塩見　石野先生は前回の横浜なので、年会の記憶もまだ新しいところだと思いますが、今日はどうぞよろしくお願いします。まず、色彩あざやかなクロード・モネの『ラ・ジャポネーズ』に秘めたことなど、お伺いしてよろしいですか？

石野　モネは子供の頃から好きだったんですけど、日本の文化を世界に発信するというメッセージを込めようとしたとき、その影響力がわかりやすいのはこの作品かなと考えたのがきっかけでした。日本の科学って、アメリカやヨーロッパと違うと思いません？特に生物学。例えば生き物ひとつをあげてみても、僕たちにとって生物って仲間じゃないですか。でも彼らの考え方は生物を明らかに支配していて、哺乳類は家畜だから思い通りにできる、そういう考え方があるんですよね。昔の西洋の書籍を読むと、動物は痛みを感じないと書かれていたりもする。協調原理がベースにある日本人的には、競争原理を持ち込んだそういう感覚はなかなか受け入れにくいところですよね。日本人が進化を好むのって、自然淘汰うんぬんではなく、生物同士の仲間意識みたいなところが好きだからだと思うんです。だから、進化をどう考えるか、生物をどう考えるかを大事にしているし、違う考え方があることの大事さも理解しているじゃないですか。今までは西洋の科学に合わせているところがあって、彼らの考えているように論文を書けば通りやすいのも事実だけれど、ある程度、日本人的な思想をぶつけてみてもいいかなと。『ラ・ジャポネーズ』が世界の絵画に影響を与えたように、日本人のオリジナリティーを世界に向かって発信することの重要性を重ね合わせました。刀を持った侍が、ピペッドマンを持った僕に変わっているのはご愛敬ということで（笑）。

岩崎　日本的であたたかみを感じる素敵なデザインですよね。それに重ね合わせた先生のメッセージ、すごくわかります。そういうなかで欧米のジャーナルに論文を通そうとするから、なんとなく欧米の論文をマネしようとしちゃって。

石野　妥協すれば論文は通りやすいかもしれないけど、それより自分たちの発信力を上げるためには、国立競技場を新しく建設するくらいの予算を科研費のシステムに組み込んでもらいたいよね。お隣の中国では、自分たちで創ったジャーナルに必ず投稿しているわけでしょう？それでインパクトファクターだって結果的に上がっているし、実績のあげ方が徹底されていますよね。Genes to Cellsでそれができないのは、日本人の感性ではそういうやり方をえげつないって思ってしまうからですよね。でも、中国はそれができる、欧米だって戦略的にやってきているんですよ。Nature、Cell、Scienceを抑えるってことは情報を抑えるってこととイコールですから。欧米が世界で負けないシステムを構築してきたなかで、我々は時間差のある状況で戦っているんだからね。後発国家が感性とか気にしていたら勝てるわけがないんですよ。

塩見　お行儀よくしている場合じゃないと（笑）。外国との違いという切り口では、年会特別企画に元外交官の佐藤優氏が登壇されました。『科学に潜む宗教的思考の危うさ』と題した講演はメインホールが満席でしたね。

石野　ありがたいことに多くの参加者が来てくれましたね。佐藤さんの著書には、日本人と外国人との違いが描写されていることが多くあって、日本の文化や思想みたいなことをかなり意識されている方なのかなと思い、年会にお呼び出来たら面白いかなと。参加者にはシウマイ弁当も好評だったようです（笑）。科学ってものの考え方だと思うんですよね。だから、僕たち日本人が世界のなかでどういう立ち位置になるのかってところを、ちょっと違う分野の方の視点で話してもらいたかったんです。当然、欧米とは発想が違います。彼らは良くも悪くもキリスト教に縛られている面もあって、科学はキリスト教がアンチテーゼみたいに言われているけど、決してそうではなく、科学そのものがキリスト教の中から生まれたシステムとも言えるんじゃないかな。僕たちはさほど影響を受けずに科学を捉えているから、そもそもの思考が違う。だからこそ、日本人であること自体が実はオリジナリティーなんだということを素直に出せればいいんだけど、西洋思想と相容れない部分を意識し過ぎてしまう向きがあるように思います。論文を書くときってシャープな論理思考になるじゃないですか。でも日本語だとすこしぼやかした表現にもできる。

岩崎　自分自身ではなかなか気づかないのですが、日本語よりも英語のときのほうがちょっと強気なんじゃないかと言われることもあります（笑）。日本人の感性でいい論文を選ぶジャーナルがあるとよいですね。

石野　日本は個人で戦っている感じだから、自国のサイエンスを大事にしようと思えば、そういうポリシーのジャーナルは意義がありそうですよね。

塩見　ポリシーをもつのって大事なことですよね。年会の全体日程やプログラム編成など、まさにそういうものだと思います。先生の年会では、ワークショップの枠を90分と120分、二つの時間を設定されたようですが、分生年会ではめずらしかったのではないでしょうか？

石野　国際化みたいなところを考え、英語でやってもらえるセッションは長いほうの120分枠を基本にしました。ポスターの時間は削りたくなかったので、全体日程としては苦肉の策だったという面もありましたが（笑）。

塩見　2018年会はオーガナイザー・スピーカーの女性比率が1/3と高かったのですが、これはどんな工夫をされたのでしょうか？

石野　シンポジウムはプログラム委員による指定企画とし、もともと女性に多く入ってもらうようにしました。一方の公募ワークショップは、女性や若手の参加を積極的に促すため「女性や若手研究者がオーガナイザーや指定演者に入っている企画を優先して採択します」というメッセージを募集要項に記載しました。ただこれは分子生物学会のアイデンティティーですから、結果的に自然とそういう比率になったんだと思っています。また、年会組織委員も医科歯科のメンバー5人のうち2人が女性で、井関祥子さんと金井正美さんというアイデア豊富なメンバーに恵まれて、検討する様々なことが非常にスムースでした。年会長にかぎらず、企画の段階から女性が入っているのが重要ですよね。

岩崎　横浜での年会は、今回の10回目にして美喜子さんが初めての女性の年会長ということで、また新しい雰囲気になるんじゃないかなと私も楽しみにしています。分生の年会長としても、1995年の岡崎恒子先生、翌1996年の大塚栄子先生以来、女性は3人目というのはちょっと驚きです。

塩見　まだまだよね。では、分生の女性会員にメッセージはありますでしょうか？

石野　夫婦で研究者をしていると、研究室を二人で監督しているみたいな悪いイメージをもつ方もいたようです。僕たちの場合、テーマ的にはずっと一緒にやっていますけど、イギリス留学から帰って1年くらいでそれぞれが研究室を構えるようになりました。でも、この人は男性だ、あの人は女性だと議論するのっておかしいと思いません？僕の海外の共同研究者は女性だし、いちいち分けて考えるのがそもそもおかしい。日本でフルプロフェッサーが大変だと思うのは、ズバリ子育てです。育児支援がいまひとつ充実していない、社会の理解がまだまだ乏しい状況にあります。実家が近くにあるとか、そういった環境がないと研究を続けにくい方が少なくないでしょうね。日本の研究環境は、女性が自由に研究を続けていけるような状況ではないということなんだと思います。でも実際問題、子供ってしょっちゅう熱を出すんですよ。それが教授会の日だったりすると、休みにくかったりするわけですよね。そういうときこそ、夫婦で工面しながら乗り越えていく。特に生物学は女性の感性が活きる研究分野ですし、そこが変わらなければもったいないんですよ。

塩見　なんで環境の整備が進まないんでしょうね。子供が熱を出したときに看てくれる託児所を設置しようとか、やるべきことはわかっていると思うんです。

石野　誰がどうやってきちんと評価するか。優秀な若い女性研究者という次世代の戦力が去ってしまうようなことは絶対に避けないといけませんよね。旧態依然とした馴れ合いではなく、男性にとっても女性にとってもよい環境、これからを見据えた制度設計を進めるべきですよね。

岩崎　入試の合格点を操作して女性の合格者数を減らすというような話もありましたが、続けられないなら排除しようっていうことではなく、働き続けられる環境をつくっていこうというのがどう考えても正しいはずですよね。

石野　パートナーと一緒に研究したいってなると、男性は稼がなきゃいけないという思いが強くなってあまり無茶しなくなる、保守的になるんだよね。だからそれを逆手にとって、女性には特にチャレンジングなテーマをしてほしいと言っていた時期もありました。パートナーと相談してそれができるなら、そういう時期があっていいと思います。本来は女性も男性もなくて、研究者を目指すんだったら、自分がしたい仕事をするためになんとかしなさいってこ

とですよね。

塩見　自己努力でできることを探す、というのは重要なメッセージですね。

石野　昔、家庭を犠牲にして仕事をするのが偉いんだっていう変な思い込みがありましたでしょ。いまでもその手の昔話を武勇伝のように語る人もいるんだけど、そういうボスの下にいる若手はもがいているでしょうね。時代に逆行していることを聞かされるんですから非常にストレスフルだと思います。僕自身が迷惑千万な思いでいた時期もありましたから、そうじゃない研究者を目指してきたのもあり、フラットな研究室運営をするというのが自分の核になっています。

塩見　石野先生には、日本の若手研究者がどう映っていますか？

石野　まずは、ラボを自由に移れる流動性、かな。そのあたりが担保されていない今の状況だと、特に若手はかわいそうです。僕たちの頃は少なくとも3回はテーマを変えるよう言われていました。学部のときと大学院のとき、ポスドクのとき、三つの違うテーマで違う分野を経験すれば、それが自分の研究者としての核になる。そういう意味でも、流動性として考えられるのが海外留学ですよね。

塩見　若手の海外留学は確かに減ってきていますね。

石野　もう一つは、予算。21世紀に入って科学予算を増やさなかった先進国は日本だけなんです。欧米諸国や中国は増加しているのに、それで研究力の順位が下がったとか言われるのはちょっとどうかと思いますよね。そうこうしているうちに、他国は最新鋭の機器を導入しているんですから。これでは、日本の若い人たちが自由に伸びていけるか心配です。

塩見　それでいて、有期雇用とか言われるとね…

石野　僕たちが若い頃って、10年ごとにやることを考えられたんだよね。だから、下積みの時期があっても、そのあと、ある程度の裁量をもってやれる時間がありました。でも期限付きがベースだと、どこで途切れるかわからないわけですから、なかなかチャレンジできない。ラボを立ち上げたばかりだったり、留学から帰ってきたタイミングだったりすると、5年くらい論文が出ないケースって結構ありますからね。

岩崎　それなのに、研究費が2〜3年で終わってしまう若手に挑戦的なテーマが求められたりして…若手や学生さんたちが研究を続けていきたいって思えるようにしないといけないと思います。

石野　たった数年で挑戦的なテーマと向き合うのはむずかしいし、そんなの挑戦的じゃないよね。海外の研究現場と比べたとき果たしてどちらに魅力があるのか、抜本的なところの軌道修正が必要でしょう。

塩見　海外では分子生物学会と名乗る学会は多くないようですが？

石野　「分子生物学」って、いまや誰もが方法論として使っていることなので、皆さんが個別のテーマでそれぞれ研究しているんだし、日本は日本でうまくすみ分けているような気がします。「エピジェネティクス」って言葉にも言えるんですけど、わざわざそれを名乗らなくていいのですよ。何を名乗るかではなく、何を対象にした学会なのかというスタンスにそれは示されていますよね。誰もが入ってこられる学会。バクテリアからヒトまで、一つに集まれるからこその強み、その楽しみが日本の分子生物学会にはあるんですよ。

岩崎　先生のお話を聞いていて、分子生物学会も日本的なものなのかもしれないなと思いました。分野ごとにパツパツ区切って分けるんじゃなく、みんな融合して集まりましょうっていう、西洋にないスタイルって魅力的だと思いました。

塩見　では、バイオインフォマティクスとかAIについて、先生はどうみてらっしゃいますか？

石野　ゲノム科学とかビッグデータを扱う分野はAIがフィットするだろうと思っています。間違いなく、AIが必須の分野はますます増えていくでしょうね。研究分野が変化するスピードからしても、学会はいろんな意味で世代交代が必要でしょうね。過去をベースに考えてしまう日本人はなおさら、意識を根底から変えるためにも軸を変えるべきなんでしょうね。

塩見　まさに分子生物学会がその時期にきていると私も思っています。

石野　いろんな学会がありますけど、「分子生物学会」って生物学が好きな人が集まってできた学会で、それは今でも継承されている大きな柱のひとつだと思います。規模の大小とは関係なく、そこを大事にしながら変化していって欲しいですね。

塩見　私たちの2021年会へエールをお願いします。

石野　都市ビルみたいなところから始まった第1回年会から歩んできた者としては、横浜で年会をするようになって、これはすごいことになってきたと思いましたよ。ただ、40年をかけて変化してきたことも事実ですし、僕たちの年会ではなるべくお金をかけずにやる、三日間でどれだけコンパクトにできるかを試した年会でもありました。分生は若い参加者が多いし、一年の最後に参加する学会で発表ができなくなったりしたら一大事ですからね。日本列島を襲う台風や地震などの自然災害で学会が開催できなかったケースもありましたし、そういうダメージを最小限にするためにも、2018年会で災害保険の議論をスタートしました。それが理事会に引き継がれて、次の2019福岡年会で加入できたと聞いています。横浜開催が最後だと思うと感慨深いものがあります。塩見さんで10回目ですもんね。参加した人たちがいい思い出を作って、できれば横浜に戻ってきたいという機運を高められたら素晴らしいですね。

岩崎　横浜できらびやかに年会を開けると、若い研究者へのアピールにもなります。私はやっぱり日本が好きなので、日本の研究環境がよくなって欲しいと思いますし、研究する場所のチョイスが海外しかないっていう状況にはならないで欲しいです。

石野　海外へ留学すると、アメリカやイギリスに残ったほうが論文を書くのも楽だよねって思うことが少なくないけど、わざわざ日本へ帰ってきて、苦労しながらも論文を書いているじゃないですか。そうやってひた向きに努力している若い人が大勢いますし、文科省や学振など、行政機関への働きかけは僕たちがこれからもやり続けなければいけませんよね。ですから、若い人たちが学会や年会を盛り上げていってくれることを期待しています。

塩見　大事に育ってほしいですよね、日本のサイエンスが。石野先生、今日はありがとうございました。

石野 史敏（いしの ふみとし）
1955年生まれ
第41回（2018年）年会長
第22期監事、第16、17、18期庶務幹事

1978年　東京大学理学部卒業
1983年　東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
1983年　東京大学応用微生物研究所　助手
1991年　東京工業大学遺伝子実験施設助教授
2003年　東京医科歯科大学難治疾患研究所教授
2014年　同　所長
2021年　同　名誉教授

MBSJ

年会長挨拶

第41回日本分子生物学会年会
年会長　**石野　史敏**
（東京医科歯科大学難治疾患研究所）

大変嬉しいニュースが飛び込んできました。もちろん本庶佑先生のノーベル医学生理学賞受賞の話です！第41回日本分子生物学会年会のテーマには「日本からオリジナリティーを発信しよう」を掲げましたが、まさにそれを実践され、評価されたものと大変嬉しく思っています。大隅良典先生、山中伸弥先生のご業績もそうですが、人類の文化発展に高く貢献したことを誇れるものを持っているわたしたちは幸せだと思います。是非とも、これに続きたいものですね。

現代の科学は西洋思想に基づいて成立したものですが、日本人の自然や生物への向かい合い方は独特であり、それが実験の発想、結果の解釈などにも微妙な影響を与えていると思います。ですから、わたしたちが「自らの好奇心を追求する研究を深める」ことこそが「日本からのオリジナリティーを生み出す」ことにつながると感じています。ポスターにクロード・モネの代表作の一つ「ラ・ジャポネーズ」を採用したのも、そのような意図を込めています。いつものように分子生物学会風アレンジが加えてあり、背景に書かれている団扇のデザインには、これまでGenes to Cells誌の表紙を飾った図から、私の専門のDNA、ゲノム、エピジェネティクスに関係するものを集めています。編集部のご好意で使わせていただきましたので、是非、学会ホームページのGenes to Cellsの表紙ギャラリー*の説明と合わせて楽しんでください。なお、この年会テーマと関連して大会最終日の昼には、作家の佐藤優さんに特別講演「科学に潜む宗教的思考の危うさ」をお願いしています。宗教観に由来する「日本と西洋」の違いだけでなく、思想活動そのものに潜む盲点にまで踏み込んだ講演をしていただけるものと思っています。

今年会では昨年に引き続き、午後一番の大会のメインの時間にポスターの発表時間が設定してあります。そしてLate breaking abstractを含め全てのポスター発表にディスカッサーを配置しています。分子生物学会年会の原点である活発な議論を十分に堪能して下さい。ディスカッサーとして御協力いただきます多数の先生方には、この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。シンポジウム企画はプログラム委員会の先生方にお願いをしました。聴衆・発表者ともが刺激を受けられるような魅力的な企画を立てていただいたと思っています。注目していただきたいのは、シンポジウム・ワークショップ全体の1/3で、女性・若手がオーガナイザー・座長を務めていることです。国際学会と比較するとまだ十分ではないですが、この流れが日本の学会の新しい形になっていくことを期待しています。海外若手研究者招聘企画である留学中の海外会員の発表支援は、学会からの要請を受け今年会では復活させました。また、奇しくも平成で最後の年となった2018年は、西日本豪雨、北海道地震、数々の台風など多くの災害に見舞われた年となりましたが、被災された学生会員には、例年通り参加費免除の対応をしております。参加された全ての会員の皆さんが、本年会で有意義な時間を過ごしていただけるよう祈念しております。

最後になりましたが、基礎系の学会がこのような大きな年会を横浜で開催するためには、展示会場やランチョンセミナーの運営などで関連企業の方々に大変お世話になっています。横浜では、幸いポスターと企業展示が同じ会場に設置されています。学会員と年会を支援してくださる企業の方々の、どちらもが満足感を持って大会を終えられるよう、会員の皆様には企業展示にも頻繁に足を運んでくださるようお願いします。

*http://www.mbsj.jp/gtc/cover_gallery.html

あとがき

今回、大変ありがたいことに、美喜子さんにお声がけ頂き、横浜ヒストリアの歴代年会長インタビューに参加させて頂きました。インタビュー記事を読んでいただくとわかると思いますが、歴代年会長の先生方がそれぞれ個性的なアプローチで年会成功に向けてご尽力されていた様子を臨場感たっぷりに伺うことができ、とても楽しい時間でした。新型コロナウイルス禍の下でのインタビューでしたので、ときに延期が必要になったり、感染状況の様子をみながらタイミングを考慮したり、さらには台風が来襲したり、と難しい部分もありました。こんな状況下でしたが、快くインタビューに応じてくださった歴代年会長の先生方に心から感謝申し上げます。また、インタビュー会場の設営や冊子の作成については、分子生物学会事務局の並木さんに大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

先生方には、年会のお話の他にも分子生物学会の今後や若手研究者、女性研究者に関するお話も伺うことができました。期待を感じるコメントも多く、身の引き締まる思いです。今は正直、自分の研究やまわりのことでいっぱいいっぱいな部分もありますが、今後、ステップアップして経験をコミュニティーに還元していけるような研究者になりたいという気持ちが強くなりました。また女性研究者については、2001年の年会において保育室を設置するなど、世間に先駆けてサポート体制を組んだということを今回初めて知り、感動しました。とはいえ、未だにシンポジストやシニア研究者の女性比率などをみると改善が必要な部分もあり、根強い問題なのだなと改めて実感する部分もありました。

参加者の方々が活発なディスカッションを通して大変盛り上がり、大満足でパシフィコ横浜を後にしているというこれまでの年会の成功は、歴代年会長の先生方や、組織委員会・プログラム委員会の先生方、そして学会・年会事務局の方々などたくさんの思いや裏方の努力を通して勝ち取ったものなのだな、と改めて実感しました。私自身、研究発表の最初にはオーガナイザーへの謝辞を述べていますが、今後は、そうした方々への謝意も思いっきりこめていきたいと思ったところです。

今年の年会は、昨年に引き続き極めて困難な状況の中での準備となりましたが、年会長はじめ、みなさんのこだわりが沢山つまっています。組織委員会の一員として、これまでの年会がそうであったように、皆様に良いディスカッションを通して年会を楽しんでいただければ、と心から願っています。

2021年11月

岩崎 由香
慶應義塾大学 医学部
分子生物学教室 准教授

第44回 日本分子生物学会年会

横浜ヒストリア

令和3年12月1日発行

発行所

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2-11-5　人材開発ビル4F

TEL：03-3556-9600　FAX：03-3556-9611

ACTIVE MOTIF®

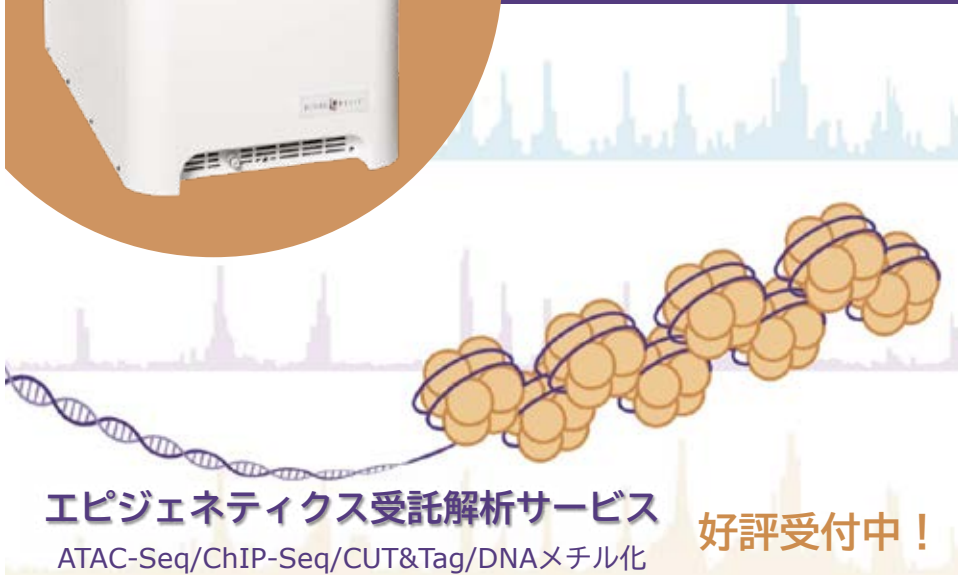
Enabling Epigenetics Research

PIXUL™

96ウェル対応ソニケーター

クロマチンの断片化

プロテオーム解析に



エピジェネティクス受託解析サービス

ATAC-Seq/ChIP-Seq/CUT&Tag/DNAメチル化

好評受付中！

アクティブ・モティフ株式会社

www.activemotif.com

お問合せ先■テクニカルサポート■

Tel: 03-5225-3638　Fax: 03-5261-8733

E-mail: japantech@activemotif.com

Bioedit生命科学英語論文校正サービス

医学・ライフサイエンス分野専門の英語論文校正
論文掲載までの高品質なサポート

Bioeditは日本での研究経験がある代表者のPatrick Hughesにより、2001年にイギリスのマンチェスターで設立されました。生命科学分野の英語論文校正で長年の経験と、有名誌への多数の掲載実績があります。校正はすべて厳正な審査のもと採用された、英米出身者で英語ネイティブのPh.D.保有研究者が担当します。
質の高いサービスで、論文掲載をより確実に。

- Basic / Standard / Premiumの3つのサービス
- 2日～7日の選べる納期
- 豊富なオプションサービス
  - ・目標ジャーナルの選択（Journal Selection）
  - ・事前査読（Pre-Peer Review）
  - ・カバーレター作成（Cover Letter Writing）

bioedit®
www.bioedit.co.uk

科研費・公費でのお支払は日本代理店から
日本分子生物学会会員の方には手数料割引

SD biosystem
www.sd-biosystem.co.jp

ONLINE CONF

学会の現地・オンライン同時開催システム

第44回
日本分子生物学会
年会で利用
されています

ポスター セッションを オンラインで実現	参加登録から 事後配信まで 一元管理	協賛企業の オンライン展示 にも対応

- 日本語 / 英語画面切り替え機能
  国際学会でも利用可能
- Webサービスのため
  インストール不要でご利用可能

学会や研究会開催をお考えの方、お気軽にお問合せください！

E-MAIL	online-conf@agri-smile.com
TEL（フリーダイアル）	0120-894-751
システム提供元	株式会社AGRI SMILE

ONLINE CONF 検索

30th Anniversary

PACIFICO YOKOHAMA

人とひとの交流の“場”を支える施設として

これまでも、そしてこれからも

パシフィコ横浜

株式会社横浜国際平和会議場
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 1-1-1
TEL:045-221-2155（総合案内）

パシフィコ横浜 公式ウェブサイト
https://www.pacifico.co.jp